

小田原史談

第 215 号

 発行所 小田原史談会
 小田原市 酒匂 2-24-13
 植田方 TEL (48) 9072

小田原宿の本陣・脇本陣

中村 静 夫

前回に続いて小田原宿の本陣と脇本陣についてお話しします。

清水金左衛門

この本陣は小田原宿でまず挙げられなければならないものです。間口は十八間(33m)あって、四軒あった本陣のうち最大で名実とも小田原宿第一の本陣と申せましょう。

江戸時代最後の年、慶応四年(明治元年:1868)九月と十二月、そして翌年の二月と、わずか七か月の間に若き明治天皇は東京遷都にからんで、都合三日もここに泊まりました。

前回掲載しました「小田原宿 東海道筋大名定宿一覧表」を参照してみてください。

この本陣の定宿関係にあった大名達のメンバーをみると、当時の名だたる大名が沢山定宿として泊っています。

徳川御三家のうち、最大の石高を持つ尾張徳川氏がまず挙げられます。薩摩の島津氏もここを定宿にしていました。

従って、今年のNHK大河ドラマ「篤姫」に出てくる島津斉彬も篤姫もこの本陣に泊っていたと考えられます。

先に紹介した交代寄合・近藤氏も、この本陣が定宿でした。

現在、この本陣は宮ノ前小公園として、また明治天皇の聖跡として小田原市民には知られていますが、明治天皇があまりに有名なためだと思えます。

しかし、よく考えてみますと二百何十年と続いていた本陣に、たまたま明治天皇が泊まったのは一過性の出来事です。

そう考えてみますと、あの土地は清水金左衛門跡地であるというのを、より一層世の人に

宣伝すべきではないでしょうか。なお正確な跡地を追及すると、特に奥の裏側(南奥の辺)はもっと広く(約13m、表通り(北側)も1m以上道路敷地に提供していますので、その分だけ広がった訳です。

出来ることなら、本陣跡に由緒、定宿関係の大名の名前、さらに跡地範囲、間取り図などを表示してもらいたいと思うものです。

久保田甚四郎本陣

この本陣は小田原宿で清水金左衛門本陣に次いで挙げられなければならない本陣です。そして、清水金左衛門本陣と同様、由緒ある本陣でした。

清水本陣が、小田原宿十九町の総鎮守たる松原神社の門前の好位置にあったように、この本陣は小田原宿本町西端の南側角地の好位置にありました。角地は町地として価値の高いところではあります。

定宿関係の大名としては、紀州徳川氏をはじめとして、福岡の黒田氏、萩の毛利氏、福井の松平氏など、名だたるメンバーでした。

しかし、残念なことにこの本陣のご子孫は何処におられるのかわからず、本陣資料は皆無に近い状態です。たまたま或るところから、この本陣の間取り図

が出てきましたので、いずれ公開されるものと思います。

なお、清水金左衛門本陣の方はご子孫が川越に居られて、小田原の研究者に残された資料(そう大量ではありませんが)を公開されています。

久保田本陣の屋敷地につき補足的説明を加えますと、間口は十間半でした。関東大地震後、旧東海道の道巾が拡げられ、現在の国道一号線の広さになった訳ですが、東海道筋の久保田本陣は、その拡幅にともない旧屋敷地の表部分が大幅に削られました。そればかりでなく、横丁つまり海岸に向かう方向の道も拡幅が行われ、久保田本陣は横丁部分も相当に削られました。具体的な数字を申しますと、東海道側(表側)で六・六m(三間半強)、横丁(西側)で三・八m(二間)削られました。

なお、清水本陣の方は地震後、国道一号線が北方に迂回したので、大幅な拡幅が行われず、小幅な屋敷地犠牲ですみました。

片岡永左衛門本陣

この本陣は、江戸時代中期からの本陣でしたが、大名の定宿関係は横田善四郎本陣のものを引き継ぎました(片岡文書)。

定宿関係の大名としては、伊予国(愛媛県)松山の松平隠岐

守、美作国(岡山県)津山の松平越後守などが主なものでしたが、前述の周防国(山口県)岩国の吉川氏もここを定宿としていました。

大名が参勤交代で旅をするとき、その家老がよく側近第一号として一緒に旅をしています。その際、大名は定宿に入ります。が、家老は同じ本陣には入らず、別な本陣に泊ったことが一般的な傾向であつたようです。

従って、近くの久保田本陣に多くの大名が泊まりましたが、その大名の家老は片岡本陣に泊っていたらうと察せられます。

要するに、この本陣は定宿関係の大名の宿泊は少なくても、近隣の久保田本陣・宿泊大名の側近を泊めていたと解されます。

清水彦十郎本陣

この本陣は前の片岡本陣と同じく江戸時代中期からの本陣で、定宿関係の大名は高橋清左衛門本陣のものを引継いでいたものでしょう。

定宿関係にあつた大名としては、出雲国(島根県)松江の松平出羽守、美濃国(岐阜県)大垣の戸田氏などが主なメンバーでした。

この本陣は清水金左衛門本陣と親戚関係にあつたらしく、屋敷位置は「ういろう」の真ん前

にあつて、欄干橋町に属していません。欄干橋町は宿場でも中心地とはいいがたく、そのためか屋敷地は比較的広かつたようです。

現在清水彦十郎本陣の跡地は大部分が駐車場になっています。

この本陣と親戚関係にあつた先の川越の清水さんが「清水彦十郎本陣の屋敷図」を持っておられ、屋敷の内容がわかります。夢のような話ですが、現在駐車場になっている空地に清水彦十郎本陣を復元したら、観光地小田原はいっそう輝きを増すのではないのでしょうか。

小田原宿の脇本陣

小田原宿には幕末ごろ

米屋三右衛門 (宮前町北側)

福住屋兵助 (本町南側)

島屋太郎右衛門 (本町北側)

虎屋三四郎 (中宿町北側)

の四軒があつたことが判つています。

ところが最近、江戸時代中期脇本陣名が判つてきました。

その根拠となる資料は、

「三井文庫、C712-28、東海道細見記、手書、天明五(1785)年」です。

当時の小田原宿脇本陣として

伊勢屋喜兵衛

平岡屋平助

島屋太郎右衛門

虎屋新左衛門

の四軒が記載されていきました。

次に地図が二点あります。

「分間延絵図」(寛政1790年から文化1805年ころのもの)、「小田原宿・万延元年図」1860年、80×150cm、小田原市立図書館蔵。

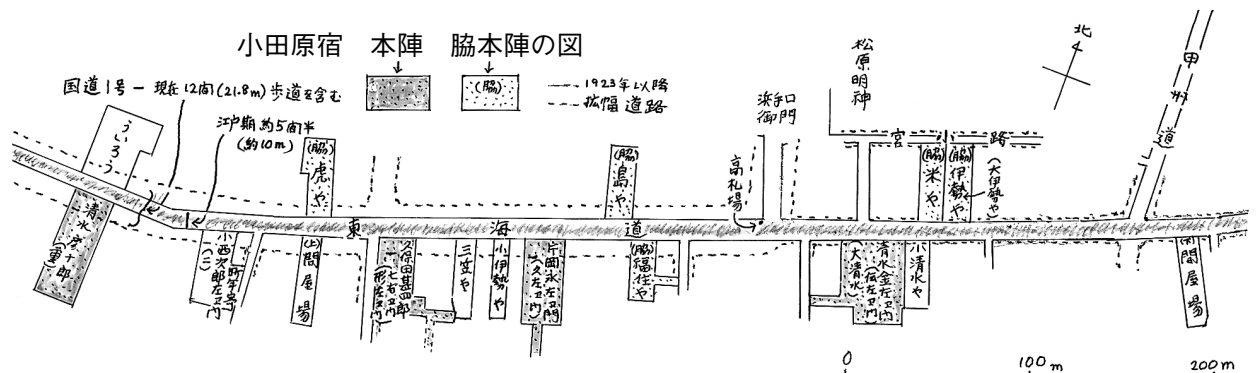
前者の図はいわゆる絵地図で、大体のことしか解りません。縮尺関係の良い地図ではありません。ただ単に本陣・脇本陣の記入しかありません。

後者の図は、縮尺関係の良い地図で位置関係は正確です。また名前前付の本陣・脇本陣名の記載があります。そして、両方の図に本陣四軒、脇本陣四軒が、大体同位置に描かれております。ですから、両方の図を見て寛政頃から幕末まで本陣・脇本陣は変化がなかったかと思いがちです。ところが、脇本陣に一軒変化があつたことが解つてきました。

本町の旅籠、小伊勢屋のことに触れておきます。

小伊勢屋は江戸時代から現在まで存続している小田原の老舗の一つです。

小伊勢屋は明治以降発展し、両隣の地所を併合し、現在では広い間口(約十二間弱)の家です。しかし江戸時代の小伊勢屋の間



口は、推定五間半と現在よりはるかに狭いものでした。

一方、宮ノ前町にあった伊勢屋喜兵衛・脇本陣の間口は八間もありました。伊勢屋喜兵衛は同じ伊勢屋でも大伊勢屋の屋号を持っていました。

本町にあった間口五間半の伊勢屋は、宮ノ前町の伊勢屋と区別するために、小伊勢屋の屋号であったと考えられます。

なお、大伊勢屋の西隣にあった米屋三右衛門の間口は約七間でしたが、「分間延絵図」では、記入が大まか過ぎて大伊勢屋と米屋との位置関係が判別できません。つまりこの二軒は、同一家とも見間違えがちです。

中野敬次郎氏が「小田原市史」で伊勢屋喜兵衛を米屋喜兵衛と誤認されたのは、やむを得ないことであったと同情するものです。

なお、伊勢屋喜兵衛は幕末近くまで脇本陣を勤め、何らかの事情で幕末頃、米屋三右衛門に脇本陣の地位を譲ったものであらうと思われます。

島屋と虎屋について知っていることをお話ししましょう。

島屋の姓は中川氏です。どうして解ったか？ 今から四十年程の昔の話です。

当時私は三笠屋半右衛門（江戸時代・本町南側）のご子孫に会っ

て明治初期の本町全員の土地所有者の名前の入った図を見せてもらったことがあります。

その図の脇本陣島屋太郎兵衛の位置に中川太郎兵衛と記入があったからです。

次に虎屋です。この家は相当に由緒ある家かと考えられます。北条氏は虎の印を用いましたから、その時代からの家とも思えない訳ではないのですが、あまり憶測で皆さんに誤解を与えてはいけないので、この辺で話を止めます。

ただし、相当の資産家だったらしいのです。

昔、三井文庫で江戸時代の長者番付を見せてもらったことがあります。

日本全国の長者が百人以上、東西にわかれ記入があり、勿論上位ではないですが、下位の方に虎屋三四郎があった記憶があります。

いずれにしても下位でもその名を刷り物（印刷物）に記入がある以上注目してよいことです。

しかし、残念なことに虎屋の姓は不明です。

虎屋三四郎の御子孫が何処かに居られるなら、残された書類など見せていただきたく思うのは私ばかりではないと思われます。

つぎに、福住屋の姓はなんであつたのか？ 先にあげた三笠

屋の御子孫が所持されていた明治初期の図によりますと、福住屋の位置に安藤次郎の書き込みがあり、かかることから福住屋は安藤氏だったと思われます。

おわりになりましたが、今回「小田原宿 本陣・脇本陣など一覽表」を添付しました。

脇本陣については今までいろいろ説明を加えましたが、この一覽表の脇本陣のところを見ていただきたく思います。

すると、脇本陣については天明六年（1786）以前は記録がありませんので判らない、というのが現状です。

今後の探求がのぞまれます。

訂正

前号（第二一四号）九頁「小田原宿本陣と東海道筋大名定宿関係一覽表」中、「黒田甲斐守 筑前 秋目」とあるは「筑前 秋月」の誤りです。

お詫びして訂正いたします。



二一五号（平成二十年十月号）目次

小田原宿の本陣・脇本陣 中村静夫……………	1
来年が現在の酒匂川筋の 築造竣工四百年 小野意雄……………	5
西岡遼明 —ある文人司法官の生涯(4) 直江博子……………	9
下田隼人の事件は、 「乱」だったのか！ 石井啓文……………	12
続・酒匂史談⑥ 川瀬速雄……………	16
韭山・修善寺の史跡を巡りて 田中 豊……………	19
小田原の商店街 史料委員会……………	21
片岡日記④ 片岡永左衛門……………	24
史談再録⑤ 怪異綺談 門松利平……………	25
旅のつれづれ俳句日記 剣持芳枝……………	26
史跡めぐり ご案内 勝俣淳一郎……………	27
特別賛助会員……………	28

小田原宿 本陣、脇本陣など一覧表

H20. 8. 中村編

() 中 村 補 記
() 資料による補記

年代	本 陣	脇 本 陣	問 屋 役	町 年 寄	資 料
延宝 7 年 (1679)			二郎左エ門(小西) 助左エ門		三井文庫、高陽 2049 仮称「江戸道中記」木版、小型本 延宝7年
元文 4 年 (1739)	〔清水〕伝左エ門 〔久保田〕七右エ門 佐左エ門〔文政時、清水彦七郎継承〕 善四郎 〔文政時、片岡永左衛門継承〕				元文4年、文政11年(1828)書き写し、 「本陣共、御定宿控」 小田原市立図書館蔵
延享 2 年 (1745)	清水金左エ門 久保田七右エ門 横田善四郎 高橋清左エ門				〔沼津市史、資料編 近世2〕 225頁
延享 4 年 (1747)			小田原御継役 〔問屋役に相当するか〕 清左エ門		〔近世交通史料集4〕 御伝馬関係、549頁
天明 6 年 (1786)	清水伝左エ門 片岡久左エ門 久保田形左エ門 清水彦重郎	伊勢屋喜平エ 平岡屋平助 島屋太郎右エ門 虎屋新左エ門	近藤助左エ門 平井新左エ門	小西次郎左エ門〔中宿町〕 久保田形左エ門〔本町 本陣 兼帯〕	三井文庫 C712-28 〔東海道細見記〕 手書き、天明5年
享和 3 年 (1803)	〔清水〕金左エ門 〔久保田〕才助 〔清水〕彦十郎 〔片岡〕永左エ門	〔島屋〕太郎左エ門 〔伊勢屋〕喜兵エ 〔虎屋〕三四郎 〔福住屋〕兵助			〔小田原市史〕331頁 中野敬次郎 編著
文化 3 年 (1806)	〔久保田〕形左エ門 〔清水〕伝左エ門 〔清水〕彦(七) 〔片岡〕久左エ門 十〔推〕	〔島屋〕太郎右エ門 〔伊勢屋〕喜兵エ 〔虎屋〕新左エ門 〔福住屋〕兵助	新左エ門 助左エ門 庄次郎		三井文庫、高陽 2042 〔東海道木曾路広駅道中記〕 文化3年
弘化 4 年 (1847)	清水金左エ門 久保田甚四郎 清水彦十郎 片岡永左エ門		〔虎屋〕三四郎 助左エ門		〔諸国道中たび鏡〕 弘化5年
万延 2 年 (1860)	金左エ門〔宮前町〕 甚四郎〔本町〕 彦十郎〔欄干町橋〕 永左エ門〔本町〕	三右エ門〔米屋、井上氏 宮前町北側〕 登ら〔推、福住屋 本町南側〕 太郎兵エ〔島屋、本町北側〕 三四郎〔虎屋〕			〔東海道小田原宿絵図〕 約1.5m×0.8m 万延元年 小田原市立図書館蔵
文久 2 年 (1862)			半左エ門〔本町〕 〔三笠屋、菅川氏〕 伊十郎〔宮前町〕 〔小清水屋、清水氏〕	久保田甚四郎〔本町〕 関村佐五兵エ〔新宿町〕 小西二郎左エ門〔中宿町〕	〔小田原藩の研究〕 内田哲夫

注釈

1. 「問屋場」は人馬継立所ともいい、宿場の要であり、「問屋役」はその長であり要職であった。本陣・脇本陣の主人が兼帯的に勤めることもあった。
2. 「町年寄」は町行政の長であり、やはり要職であった。町年寄は支配していた町の名主達の上に立ち、町行政の責任者であった。

酒匂川の治水史に憶う

来年が現在の酒匂川筋の

築造竣工四百年

小野意雄

酒匂川の水制工事

現在の酒匂川筋の築堤工事

竣工四百年に思う

富士山山宝大噴火三〇〇年の年になるということで、昨年、平成十九（三〇〇七）年は、講演会やＴＶ報道等々いろいろな形で酒匂川の治水に関わる幕府と小田原藩、そして、流域農民の労苦が話題になりました。

そつしたなかで、「百年間保つた大口土手」ということで、有識者の間では前期大久保藩の水制工事の素晴らしかったことが再評価されました。喧伝はされていませんが、暴れ川の酒匂川で、百年も川堤が保つたということは、大変なことです。偉業の有難さを再認知しました。

百年間というのは、現在の酒匂川の川筋は人工のもので、大口から河口までの川筋両岸の堤は自然堤ではなく江戸時代初期に築造された人工の堤で、その竣工が慶長十四（一六二九）年八月だ

つたからです。

こうした工事は、流路を変え
る瀬替え工事と通称されています
が、酒匂川の場合は、大口か
ら酒匂平野に流れ出た流水は、
堆積する土砂による天井川化と
溢水の結果、幾筋もの流路に分
れて、大雨の後はその都度洪水
を起こしつつ田地を荒廃させて
いたという伝承があります。

「酒匂川は暴れ川」という意味には、「激しい濁流」という意味だけではなく、「酒匂平野に溢水する激しさ」の意味も含まれていたと思います。従って、一筋の流れの流路の付替えではなく、幾筋もの流路を統合・一本化しての瀬替えという意義をもつての、大きな特徴が指摘されます。

つまり、来年は、二〇〇九年
ですから、四百年の記念すべき
年になります。このことは、も
っともっと記録してもよいこと
と思います。

大久保氏の事績

小田原北条氏が太閤秀吉に降つたのは、天正十八（一五九〇）年。この年、大久保忠世公が小田原藩の初代藩主になりました。

忠世公が、酒匂川の治水・制水工事に着手されたのは、文禄二（一五九三年）のことです。そして、同年、岩流瀬土手工事を竣工させますが、忠世公は翌文禄三年に亡くなられ、忠隣公が継がれ、工事を続行させます。千代の蓮華寺文書に、酒匂川の瀬替え・新護岸工事が下流まで終了し、最後に大口土手の竣工に到ったのは、慶長十四（一六〇五年）という記録があります。工事期間十六年間の大事業が成し遂げられたのです。

こうした大仕事を成功させた力には、藩主のリーダーシップとともに家臣のなかに有識者・技術者が存在するはずですが、有識者・技術者の名前等の伝承はありません。甲州流金山奉行大久保長安の採用とともに、工事の協力者には伊奈氏が想定されます。従事した人たちには、小田原に流入した武田の遺臣たち、流域の農民等がおります。小田原北条氏の大外郭等の築城工事従事経験・技能継承があり、新しい時代を期待し、拓くことに燃えた協働の成果が、偉業になったと思います。

小田原北条時代

武田信玄が、竜王の一番出し（信玄堤）を竣工させたのは、永禄三（二五〇）年。それから四十九年後のことです。

それにつけても、小田原北条氏の水利工事はどうだったのでしょうか。残念ながら解っていないようです。特段にされていなかったのではないかというのが、通説のようですがどうでしょう。文書の発掘がないということだけでなく、土地の記憶に語らせる手立てがあるのではないのでしょうか。左岸の山北分・向原との境界近く、松田総領分の根石と近くの八幡社、開成町の吉田神社の存在、や酒匂川左岸に松田分の土地があることなどが、解明の糸口となるかもしれません。

水制工事の特徴

大久保氏の水制工事の大きな特徴としては、第一に大口土手工事、第二に霞堤、第三に井掛り・水門工事、そして、第四に瀬替え工事が挙げられます。

（第一の特徴）

大口土工事については、内田清さんの「大口3堤2岸構造」論が大口という河川空間を巨視的に捉え、水制を構造機能的に説明してわかり易い。先述の根石の機能をも含めて観ると、酒

匂川の流路の湾曲づけと旧西川との関連を含めての河川空間の性能が観えて来ると思います。

こうした大口土工工事の手法には、甲斐の御勅使川・釜無川の工法の採用が推定されます。

(第二の特徴)

大口空間に続く、新設の匂川の築堤手法には、霞堤、別称「信玄堤」手法が随所に採用されています。今日、匂勾川で霞堤と呼ばれている堤は、藩の文書(伊藤郷左衛門控帳「大河通り惣堤間数改帳」)や地元では「入違」と伝承されていました。十八箇所が記録されています。

(第三の特徴)

井掛り・穴水門や根又水門等の灌漑用水の取入れ口工事は、匂勾堰は慶長三二(一六二五)年には拓かれていたと内田哲夫「年表」にはありますから、堤・土工工事と同時に施工と推定します。昔から幾筋かの流路をなしていた自然溢水路を、水門工事によって用水路として復元されたと思われる。

左岸の匂勾堰、川村の瀬戸堰、岩流瀬堰、鬼柳堰に継承されて行く利水技術です。匂勾堰のサイホン工法も顕彰したい技術です。川口広造は瀬戸堰での体験を萩窪堰に活かしています。

水門・用水路工事の手法の起源はどこにあるのでしょうか。

一つには、小田原用水のような大河からの分流方式、また美濃の輪中方式があります。もう一つは、大久保長安の役割の想定です。長安は、鉾山採掘の甲州流の名手ですから、水制で遅れをとる人ではないと思います。

隧道方式が想定されます。

(第四の特徴)

甲斐では、御勅使川の瀬替え工事がありますが、匂勾川の瀬替え工事とは趣旨・目的が異なります。そして、匂勾川のような大きな瀬替え工事は、なかったと思います。

他の事例で、思い当たるのは、「京流」と通称されている次の一連の工事手法です。

太閤秀吉が文禄元(一五九二)年から前田利家らに造らせた伏見城築城にともなう宇治川、木津川の付け替えによる太閤堤の構築、慶長九(一六〇四)年の桂川の瀬替えによる淀堤があります。また、尾張・木曾川筋の左岸を犬山から下流に延長十二里にわたって築いた大堤防の御囲い堤があります。

これら京流の一連の工事を目の当たりにし刺激されつつ、施工計画を大久保氏は進めたのではないのでしょうか。ではないにしても、同時代性があります。

当時、「治水の神様」と尊敬されている人に、武田信玄、成富

兵庫、加藤清正の三人が挙げられています。加藤清正は、有名な秀吉の直臣です。こうした人たちの知見から、大久保氏は学んでいることでしょう。ちなみに、江戸中期、享保・延享時代に、蓑笠之助を指導した紀州流の井沢弥惣兵衛は、御三家和歌山藩の紀ノ川の工事担当者であり、將軍吉宗にその功績を評価されたの重用された方ですが、京流の流れといわれています。

大久保忠世・忠隣は、豊臣・大阪方の諸将とかなり昵懇だったと伝承されている方です。

京流の構想をし、技術者の導入があってもおかしくはありません。そうした方でしたからこそ、小田原に入部直後に水制工事に入ったのでしょう。その民生・新田開発による地域振興を図ろうとした姿勢に驚嘆禁じえないものがあります。

匂勾川の工事に着手した翌年の文禄三年には忠隣公は、家康から関東平野の治水工事を命じられています。

宝永大噴火三百年に思う

昨年二〇〇七年は、富士山大噴火三百年の年として、各方面で大きな話題が提供されました。砂降りと大洪水、匂勾川流域が大変だったこと、治水工事の大変く地域農民の動き、小田

原藩と幕府の対応の有り様が、近々に予想される小田原地震? 防災対策と関連されて、人びとの関心を集めています。

富士山の噴火は、宝永四(一七二七)年十一月二十三日でした。

第一次被害は、田畑や住まいへの砂降りでした。続いての第二次被害が、翌五年八月八日の大口土手の決壊・大洪水でした。

小田原藩の対策は、時の藩主忠増公の決断による匂勾川流域の領地の幕府への上知、幕府の下知による諸大名の御手伝普請の導入でした。先立つ元禄十六(一七三三)年の地震災害からの復旧は、小田原藩財政を極度に圧迫・破綻させていたのです。忠増公は、幕府の最高権力者の老中、將軍は若く見識優れた綱吉公でした。時の氏神でした。

(第一次被害対策)

緊急措置として、越前岡山藩、越前大野藩、熊本新田藩、豊前小倉藩、因幡鳥取藩の五藩、後に遠州浜松藩も加わったの河川の復旧工事が展開されました。幕府の担当者は、勘定奉行萩原重秀、工事の担当者としては、関東郡代の伊奈半左衛門忠順。川浚いと土手の修復でした。別途、藤堂藩による皆瀬川の瀬替え工事は、特筆されます。藤堂高虎は築城技術が優れ、家康に目を掛けられた方ですが、京流

の瀬替え工事と思います。
(第二次被害と地域)

その土手、大口土手の崩壊が、翌年の宝永五(一七六八)年八月の洪水でした。

溢水は改修された大口土手を決壊させ、旧川筋を再現し、新川筋を造ってしまいました。

百年前の状態に戻ってしまっただけです。本川筋への復元の大工土手締切り工事は、なかなか着手されませんでした。そこで、新川筋・本川筋間の地域間対立も起こりました。

田中丘隅の事績

将軍が吉宗に代わり、幕政改革にともない、町奉行・関東地方御用掛として大岡越前守忠相が起用され、「民間省要」の著者田中丘隅により大口土手の工事が再開されました。工法には、紀州流が採用され、大口土手は、堤高・敷幅も高大に取られ、延長も長大化し文命堤と改名されて竣工します。田中丘隅の業績は、今日なお、三百年の歳月を超えて顕彰されています。

蓑笠之助の事績

この田中丘隅の文命堤も直ぐに決壊してしまいました。それほど酒匂川は「暴れ川」なのです。これに対処したのが田中の娘婿の蓑笠之助で、文命堤の復

旧と三角土手等の築堤工事を行いました。丘隅の文命宮、六地藏、蓑笠之助の著書「農家慣行」は、人心再生・生活慣行再建を図ったものであり、報徳精神に先立つ地域倫理として注目されます。

水制から利水へ

大岡の後を受けた勘定吟味役に井沢正房がおります。この井沢のことは、もっと注目してよいと思います。田中丘隅は、井沢の傘下に入ってから支配勘定格になり、蓑笠之助は、勘定役支配・代官に昇格します。

この時代は、酒匂川だけでなく、関東地方一円で、洪水対策と新田開発が積極的に展開されており、水制工事と通称される手法をみますと、甲州流を継ぐ伊奈氏の関東流、ついで井沢氏の指導による紀州流が採られております。甲州流と紀州流では、つぎのような違いというか、技法の進展があります。

甲州流は、堤に当たる水力を殺ぐため、堤根から河筋に突き出した水刎ね枠は少なく、堤も長大な連続堤でなく、堤高は低く、ある程度以上の水量は堤を超え溢れさせて、遊水地や流作場や二重堤で受ける方式です。紀州流は、川筋を直線化、高大な連続堤を築いて流水を左岸・右岸の堤間に完全に食い止め

る方式に変えています。また二重堤は、土手二筋の構造ではなく一本化して、敷は広く強固に、馬踏み二筋方式に仕立て直し、酒匂川右岸では、川面側を低いが広く、内方は狭いが高くしています。栢山堤が代表例で、曾比堤は、複合型になっています。結果として、水害地域を減少化、新耕地を増やしました。水勢を配慮してか、左岸では、川面方が高狭、内方は低いが広くなっています。

幕府に上知された藩地は、幕府代官の支配による水制工事中に段階を経て、藩に返戻されますが、採られた手法は紀州流が主流で、蓑笠之助の後を受け、さらに小田原藩からも委託を受けた九州・久留米の有馬藩では、筑後川治水工事の経験(鍋島藩の成富兵庫の手法)を酒匂川に活かしています。例えば、大口文命堤根又堰(三の堰)の水門遺跡(拝み石構造)や大井町の酒匂堰の取水門をみると、成富の石井樋(佐賀・嘉瀬川、方形構造)と類比したくなります。

資料の発掘を望む

四百年を振り返るなかで、小田原藩の資料はあまりないとの印象です。旧藩士のご子孫に継承されている資料があれば、ぜひ公開して欲しいものです。

目ぼしい資料としては、絵図類の他は、偶々金手村名主善兵衛家が伝承する書写本で、南足柄市市史や大井町町史に収録の伊藤郷左衛門の「大河通り惣堤間数改帳」が挙げられるだけです。

この資料は、伊藤が、大噴火直前の宝永四年六月二十八日に書き改めたもので、忠朝公が小田原に再入部されて直ぐに、先祖の治績を再検分させるとともに、改修・補修工事に掛かっている様子がよく読み取れます。

小田原藩は、治水の処置を、なにもしていないかった訳ではないことが判ります。俗説が横行し過ぎていたことが解ります。

酒匂川の改修工事に関連しての藩政改革、地震、火災、明治維新等々、資料の失われる事情が度重なっていたこと、どこのお家でも、その渦中をくぐり抜けて来た歴史はあります。しかし、僅かな資料でも、歴史の真実を語ってくれると思います。

例えば、荻窪用水を開削した川口広造も、報徳堀や坂口堤の二宮金次郎も、改修工事の体験のなかから生まれています。

坂口堤について

二宮金次郎の逸話として、病気の父親に代り酒匂川土手工事に参加する話があります。

その土手は、坂口堤と伝承されています。金次郎が捨て苗の松を植えた土手といわれ、富士道橋の上流十数メートルの処に栢山青年団が顕彰碑を建立した付近に想定されて来ています。その碑は、今は富士道橋下流の緑の広場に移築されています。

これらの付近は、栢山分の堤です。通称「坂口堤」由来を地名に求めるとすれば、栢山堤に平行して、小字「坂口」という土地が細長く連なっていることから類推して、小字「坂口」の前身が「坂口堤」であり、堤の改修工事によって、堤が田地に転換され、今日の姿に変わったものとされます。

つまり、往時、栢山の堤は、二重堤構造だったが、紀州流の工事で一本化されて今日の堤高・敷幅が高大な栢山堤に改築され、「坂口堤」の名前が愛称として付与、残されたのではないのでしょうか。

栢山堤を検分しますと、往時には「入違い」であったと思われる箇所が連続堤化しているのを見て取れますから、坂口堤も、長大な連続堤の一部に吸収されていると思われます。

おわりに

天の時々大きな社会変化の時に遭遇しているとの実感の強い

日々です。

地球温暖化のこともあります。が、地震あり、テロ・マルティチュードあり、ポヒュリズム、小泉劇場政治・オバマ橋下現象、格差社会化……

「その時、歴史が動く」社会の大変動の時、富士山宝永大噴火三百年を去年迎えました。復旧に向けて態勢づくりを受けた年回りです。若さと市民本位への「チェンジ」に期待が寄せられた小田原市長選もありました。

地の利・自然災害に協働して取組んだ先人の歩みを、地域資源とし、福祉・教育・生涯学習・観光、市民活動等々に、いかに活かすかの課題が提起されています。

人の和・地方分権の流れの中で、二市八町合併問題。二十万人口では確保できないが、三十万以上の中核市なら多様な権限確保ができること。

地域経済面では、農協JAも信用金庫も統合一本化されて来ている、老朽化・更新期を迎えている各種の公共施設、そうした社会経済態勢に立ちつつ緊迫化している行財政体制。事態を早急に認識して、地域の立て直しを図るリーダーシップと人心の輪・和づくりが期待されます。

参考資料

「1707富士山宝永噴火報告書」

中央防災会議

災害教訓の継承に関する専門調査会・平成十八年三月

「(明治以前) 日本土木史」

土木学会編

「地方書にみる江戸期治水論・治水技術の段階」

喜多村俊夫

名古屋大学文学部
研究論集四四

「近世日本治水史の研究」

大谷貞夫著

雄山閣出版・一九八六年刊

「町奉行大岡忠相の

地方御用とその特質
享保十七年延享五年の

酒匂川治水を中心に」

中根 賢

「幕藩制社会の地域展開」所収

村上 直編

雄山閣出版・一九九六年刊

「大口文命堤根又堰

(三の堰) 遺跡」

水門遺構確認を

目的とした発掘調査

南足柄市文化財調査報告書

第25集 二〇〇七年

「酒匂川の防水と

かんがい用水対策の今昔」

池田六郎

「酒匂川」第10号所収
酒匂川水系保全協議会刊

昭和50年

「酒匂川の誕生と大口文命堤」

内田 清

小田原市文化連盟

ふるさと歴史講座レジュメ

二〇〇七年

「富士山宝永噴火後における

二次災害の分析視角」

下重 清

小田原地方史研究23所収

二〇〇五年

「田中丘隅以前・享保改革期に

おける小田原藩の酒匂川普請」

下重 清

小田原地方史研究24所収

二〇〇七年

「信玄堤・千二百年の系譜と

大陸からの潮流」

和田一範著

山梨日日新聞・二〇〇二年刊

「加藤清正と築城と治水」

谷川健一編

富山房インターナショナル

二〇〇六年刊

西岡 逾明^{ゆうめい}—ある文人司法官の生涯(4)

直江 博子

逾明、海を行く

前回は、西岡逾明が、明治政府のもとで、酒田縣の権知事および東京府の参事として、行政官としての歩みを始めたところまでを、お話しさせていただいた。

さて、何と逾明は、官命により、使節団の一員となり、フランスはパリを目指して、出発することとなるのである。今回は、そのお話である。

「西岡碑文」

(承前)時綱維未敷。轉左院議官。商定法制。五年視察歐洲。駐佛都巴黎。就博士武祿受准國法。口講所筆記成數冊。會木戸侯至。自歷聘讀之大悅。俱訪武祿問政治大綱。得意憲之確信。君贊襄之意氣相得。有樹皇基之志。遂遊露塢。縱目歐陸之山水。訪風俗物產之盛衰而復命。

「訓読文」

時に綱維未だ敷かれず。左院¹⁾の議官に轉ず。法制を商定す。

(明治五年歐洲を視察す。佛都巴黎に駐す。博士武祿に就きて准國法を受く。口講筆記せし所數冊を成す。木戸侯の至れるに會ふ。自ら歷聘し之を讀み大いに悦ぶ。俱に武祿を訪れ政治の大綱を問ふ。意憲の確信を得たり。君は贊襄の意氣相得て、皇基を樹つるの志有り。遂に露塢に遊ぶ。縦に歐陸の山水を目す。風俗物產の盛衰を訪れ而して復命す。

「解釈」

わが国の法制度は未だ整っていないかった。君は左院の議官となった。日本の法律制度について、あれこれと議論した。明治五年、欧州を視察するために立ち、フランスの首都であるパリにとどまった。君はブロック博士に師事して、國務院(「國議院」とも訳す。原語はフランス語の「Conseil d'Etat」コンセイユ・データ、フランス政府の行政・立法の諮問機関および最高行政裁判所)について教えを受けた。君が博士の講義を筆記したノートは數冊に及んだ。木戸侯がちようどやって来たところであつた。

木戸侯は、自ら君の寓居を訪ね、君が師事しているブロック博士の講義ノートを讀み、大いに喜んだ。木戸侯は、君を同伴し、ブロック博士を訪ね、政治において重要なことは何であるかを、博士に尋ねた。木戸侯は、自分のかねてからの考えを確信出来た。君は木戸侯と完全に意見が一致し、天皇陛下が国をお治めになられる国家体制の基礎を築こうと思った。君は、そのまま帰国してしまうことはせず、ブロック博士と共に、ロシアとオーストリアに旅行をした。そして、自由に、ヨーロッパ大陸の自然を楽しんだ。ウィーンで開かれていた万国博覽会に出張し、しかる後に、命ぜられた結果について報告した。

「解説」

明治政府に出仕するようになった逾明には、一生に一度の大きな出来事が待っていた。洋行である。

英・仏兩國を中心に、ヨーロッパの先進国の議事・立法機関およびそれに関連した行政・司法の諸制度を見聞し、調査することを目的とした、「左院視察団」が結成され、左院議官となつた逾明も、その一員となつた。視察団は、中議官西岡逾明・少

議官高崎正風・同小室信夫・中議生鈴木貫一・少議生安川繁成の五名から成り、明治五年(一九三一年)二月二十七日に横浜港から出港し、三月十九日に、フランスのパリに到着した。無事に使命を果たし、日本を出発してから約一年八月後の、明治六年(一九三三年)九月五日に帰国した。

視察団の中核であつた西岡と高崎が、フランスにおける調査を担当し、イギリスについては、小室と安川がイギリスへと出張して、担当した。鈴木は、視察団の会計担当であつた。

西岡と高崎は、ブロック博士のもとへ通つて、博士から教えを受けた。法制度が未だ整っていないかった、当時の日本は、フランスを、法制の「模範国」と考え、日本の左院のことを、フランスの「國務院(「國議院」)に擬していた。逾明が、ブロック博士から「國務院」についての教えを受けていたのも、そうした事情があつたからではないか。

英・仏二手に分かれた視察団は、相互に往き来をしていた。英・仏における調査があくまで主眼とされ、他のヨーロッパ諸国における調査は、付随的なこととされた。調査・研究の合間には、例えばフランス議會を見学する等、見聞を広めた。さて、「左院視察団」が派遣さ

れる約二ヶ月前の、明治四年十一月十二日には、右大臣岩倉具視を特命全権大使とする、岩倉遣外使節が欧米へ向けて、横浜から出港した。この時、西岡遼明の親友久米邦武は、書記官として一行に加わった。岩倉使節の使命は、日本が条約を結んだ国々を歴訪して、聘問の礼を修めること、条約改正(当時、日本が諸外国と結んだ条約は、日本に關稅自主權がなく、相手国に領事裁判權を認めた、不平等なものであった)の準備をすること、および欧米諸国の制度や文物を調査研究することであった。アメリカ・イギリスを回って来た岩倉使節団は、明治五年(一八七三)十一月十六日に、パリに到着した。この後三ヶ月間、明治六年(一八七三)二月十七日まで、彼らはパリに滞在し、先にパリに到着していた左院使節団と、緊密な交流を持つ。

岩倉使節団の記録は『米欧回覽実記』であり、これは現在岩波文庫に入っており、(久米邦武編 田中彰校注『特命全権大使米欧回覽実記』全五巻)読むことが出来る。多数の銅版画も添えられており、明治初期の米欧の様子を知ることの出来る、非常に興味深い記録である。

岩倉使節団は、幕末維新期の

最大の遣外使節団であり、総勢約五十名から成っていた。右大臣岩倉具視が、岩倉使節団の長たる特命全権大使であったことは、前にも述べたが、使節団のナンバー2たる副使は、木戸孝允であった。

木戸孝允は日記を残しており、三ヶ月間のパリ滞在中に接触した人々の名前を日記の随所に記している。木戸日記に登場する人々についての研究が行われており、それによると、木戸がパリにおいて接触を持った(木戸日記に名前の登場する)人々は、九十四名にも上る。木戸の人間関係の多彩さが反映されていると言えよう。そして、木戸日記の中で最も頻繁に登場するのは、山田顕義(21回)であり、その次が、西岡遼明(20回)である。三番目に多いのが、青木周蔵(14回)であり、遼明は青木を大きく引き離している。また、最も多く木戸と会っている山田とは、一回しか違わない。これをどう考えるか。

前回、遼明は木戸孝允の推薦により、酒田縣の権知事となつたことをお話しした。遼明と木戸との間には、親しい交わりがあり、パリにおいても両名は親しい交わりを持った、と言うことが出来るのではないか。木戸がパリで接触した人物として、

彼の日記にたった一度しかその名が記されていない人物は、四十二名にも及ぶ。ちなみに、ブロック博士の名前は四回、登場している。

木戸の日記を読むと、遼明が記した、ブロック博士の講義ノート数冊を、木戸が読んだのは、明治六年一月十三日のことと考えられる。この時は久米邦武も木戸に同行しており、『久米九十年回顧録・下巻』には、次のように書かれている。(旧字体は新字体に改めさせていただいた)

其の席で西岡は「ブロック博士が『日本は開初から一系の帝統を奉ずるを誇る珍しい国柄なるに、吾人に接した日本人は皆政治の三権分立を把持するは何故か、奇怪に思ふ』と言うたから、『然らば政治は三権ではないのか』と(遼明が・筆者注)推し返した処、ブロックは答えて『無論行政・立法の二権が通議であるが、民主共和の政治には理論上に三権分立を主張して居る。然し、司法権が独立すると、裁判官は公選せねばならぬが、米国でも夫はまだ不可能』と言つた」との話を、木戸は聞いて驚き、「政治の三権は西

洋の通義と想うた処、米国民主義の主張であつたのか、浮っかりすれば皇政復興の初に国体を誤る処であつた。文明開化も、独立自由も、能く能く勘弁して論ぜねばならぬ」と驚醒され、「親しくブロックの宅を訪問して教を乞はう」と(木戸が、筆者注)西岡に(自分のブロック博士への)紹介を求められた。

そして木戸は、明治六年一月三十日の日記に、「至西岡三字半より學師ブルックの處に至る」とあり、木戸は西岡を伴い、ブロック博士に面会している。

特命全権大使の岩倉具視は、それまで視察をして来た米・英においては、學者を訪ねたことはなかったそうであるが、木戸副使からブロック博士の話を聞き、博士との面会を希望したという。岩倉は、ブロック博士から、西欧諸国の文明開化と言論・出版統制の關係、さらにはフランスの国立銀行や幣制度等にわたる各般の教示を得たらしいという。また岩倉は、ブロックから、日本の民選議院創設を時期尚早と論ずる建言を受け、急速な開化には「厚く御注意願存候」として、ブロックの建言書をパリから、太政大臣三条実美のもの

とへ送った。

このように逄明は、木戸にブロック博士の学識に対する興味を抱かしめ、博士と木戸とを引き合わせた。次いで、木戸からブロック博士のことを耳にした岩倉も、博士と面会し、太政大臣三条に宛てて、急速な開化にブレーキをかける進言をしたということとは、その是非はさておき、明治初期の日本の政治のありように、逄明が間接的に影響を与えた、とも言えるのではないか。

逄明は明治六年五月に、ブロック博士と共に、ドイツを経て、当時ウィーンで開かれていた万国博覧会に出張した際、ブロック博士の推奨で、ウィーンの「学士会合」に出席している。こうした調査の方策は、「各国に於て著名な学者に面会するか、識者を雇って見聞・質問を行う」という左院視察団の視察心得に準拠したものであった。

次回は、帰朝後の逄明が、いかなる仕事をする事となったか等について、お話をさせていただきます。

(以下次号)

1) 注

2)

3) 4)

一八七一年(明治四)廃藩置県後の官制改革で三院制を基礎に、正院・右院とともに大政官に設置。左院は立法諮問機関であった。左院は正院に従属していた。一八七三年、集議院を吸収。国憲編纂を最重要任務としたが、一八七五年、元老院創設に伴い、廃止される。

モリス・ブロック (Brook, Maurice 1816-1901) ベルリンに生まれる。フランスの有名な経済学者。特に会計学に詳しく、また、政治学に関する辞書の編纂により、高く評価されている。彼は、仏国大統領チエールと親交があった。ベルリン生まれのブロックは、どちらかと言えば、フランス的急進主義よりは、プロイセン的な漸進主義に好意を抱いていたという。岩倉使節団のバリ滞在中は、多岐にわたる問答が、岩倉他との間で行われた。ブロックは後にも、日本政府の国外への派遣代理をつとめるなど信任が厚く、明治十年、政府による叙勲を受けている。

『木戸孝允日記』全六巻 日本史籍協会 一九二九—三十年 富田 仁『岩倉使節団のバリ—山田顕義と木戸孝允 その点と線の軌跡—』朝林書房 一九九七年 一四七—五十頁

5)

天保十五年(一八四四)十月九日、長州藩士山田七兵衛顕行の長男として生まれる。陸軍少将であった山田顕義は、数え年二十八歳で、理事官として、岩倉使節団に同行する。帰国後、三十一歳以降は、軍人から司法の道へと転ずる。明治十七年、伯爵となる。同十八年、伊藤博文内閣の司法大臣、二十一年、黒田清隆内閣でも司法大臣に再任される。さらに山県有朋内閣でも司法大臣をつとめ、二十四年五月、松方内閣においても司法大臣をつとめる。司法大臣として法典編纂に尽力した。しかし、リユーマチのために第一線を引退した。その間、明治二十二年日本法律学校(現在の日本大学の前身)を設立、次いで二十三年七月には、「國學院(現在の國學院大學の前身)設立趣意書」を提出し、教育にも尽力した。明治二十五年十一月十一日急逝。

早稲田大学出版部 昭和九年四三九—四十頁。

参考文献

久米邦武編 田中彰校注『特命米欧回覧実記』全五巻 岩波文庫 一九七七—八二年

田中 彰『岩倉使節団 『米欧回覧実記』 岩波現代文庫 二〇〇

〇二年

富田 仁『岩倉使節団のバリ—山田顕義と木戸孝允 その点と線の軌跡—』朝林書房 一九九七年

西川長夫・松宮秀治 編『米欧回覧実記』を読む—一八七〇年代の世界と日本— 法律文化社 一九九五年

松尾正人「明治初年における左院の西欧視察団」 日本国際政治学会編『国際政治』 第81号 一九八六年三月 一六一—七八頁

山室信一『法制官僚の時代—國家の設計と知の歷程』 木鐸社 一九八四年

『木戸孝允日記 第二』 日本史籍協会 一九三〇年

史談会恒例の秋の史跡めぐり『郡上八幡と岐阜の史跡めぐり』です。

郡上八幡に宿泊し、岐阜城をはじめ名利、史跡を訪ねる一泊二日のバス旅行です。多数の参加をお待ちします。

詳しくは二七頁の「ご案内」をご覧ください。

小田原の郷土史再発見

下田隼人の事件は、「乱」だったのか！

石井 啓文^{ひろふみ}

はじめに

本誌第二百十一(平成十九年十月、以下211号と略す)号で、「下田隼人の処刑と大庄屋」を発表した。

小田原領で大庄屋と伝えられるのは下田隼人の他に、『新編相模国風土記稿』(以下『風土記稿』と略す)で、下大井村の項に大庄屋左京助が、上大井村の項で舊家太郎兵衛の祖先が大庄屋と記している。これまで、各自治体史や郷土史研究者が、小田原領の大庄屋制を認めていないことに、僭越だが一石を投じたと思っている。

これを読まれた本会役員の市川清司氏から、曾我原の中村祐良も「大庄屋であった」と教えられた。面白いもので、思いがけない情報は重なるものである。

ふとしたことから「隼人の事件」が「乱」であったことを窺わせる貴重な史料に気づいた。

こうしたことから、再度、「下田隼人」について発表させていただく。願わくば、211号を参照してお読みいただければ幸いである。

大庄屋制は布かれていた

長谷川撰一著『下曾我・田嶋郷土史』(昭和三年・刊)の、曾我原の舊家中村氏家系の説明に、「曾我祐之の子平次左衛門稠助、養子多門助祐良の時、姓

を中村と改む、祐良は中村の豪族林三郎右衛門越智正信の二男なり、曾我を初め近郷十五村の大庄屋なり、天正十八年小田原の役、了りて豊太閤より郷中安堵の制札を給はる」とあることを、市川氏よりご

教示いただいた。昭和初期まで、曾我原では中村家が大庄屋であったことが伝えられていたのであろう。小田原領の大庄屋が記された四例目である。

ただ、この記述は『風土記稿』の「曾我原村・舊家貞吉」の項と、ほぼ同文である。「ほぼ」と記したのは同書では、「稠助の養子多門亮祐良の時、氏を中村と改め、曾我郷を始近邑十五村の庄屋たり」とあるからである。おそらく、この「庄屋」は、「大庄屋」の誤記であろう。

ここで注目されるのが「近郷十五村の大庄屋」である。下田

隼人も施餓鬼奉納帳(『南足柄市史』No.206)に「近郷迄之大庄屋」とあった。足柄上・下郡の大庄屋も「数ヶ村から数十ヶ村を支配」(『国史大辞典』)していたのであろう。従って、小田原領の大庄屋は多くはない。史料が少ないのも当然とも言える。

さらに、『風土記稿』網一色村の項、舊家四郎右衛門も「名主割元役と云を勤しに、(稲葉)正則此役を廃す」とある。

大庄屋は「割元・用元などともいう」(211号『国史大辞典』)とあった。四郎右衛門は名主であり割元(大庄屋)役を勤め、数ヶ村名主のまとめ役だったのであろう。北条氏時代の代官が大庄屋から名主に代わる経過的措施(大庄屋の名残り)が窺える。

さらに、「正則此役を廃す」にも注目したい。私は211号で、「隼人事件の底辺に大庄屋から名主制への移行によるトラブルも考えられる」としたが、まさに正則が大庄屋制の名残りを廃止したとなれば、その推察も現実味を帯びてくる。

また、ここで特徴的なことは、大庄屋を記した関本・上大井・下大井・曾我原の四ヶ村は、元和・寛永初期の小田原城代近藤秀用と同城主阿部備中守時代は幕府領で、代官中川勘助の支配下に置かれている。

次頁の「元和・寛永初期の支配管轄体制の変遷」図を参照されたい。『小田原市史』収載の図に私が数ヶ村を加筆したものである。同市史が発行されるまでの郷土史の多くは、阿部氏を挟んで前期番城時代・後期番城時代と称して、小田原領を一括して幕府領としていたのである。

これが、小田原領に大庄屋制はない、とした原因の一つとも考えられる。この時期、地域と年代によって支配体制は全く異なるのである。この図で、隼人の関本村は飯沢村と同じグループで、阿部氏前後が幕府領、上・下大井村と曾我原村は元和から寛永九年までは幕府領であった。さらに、網一色村は阿部氏以後が幕府領であった。

大庄屋制は、多くは幕府領で布かれたことが実証されている。時代は下るが、宝永の富士山噴火後、上・下郡で幕府領となつた地域の代官であった蓑笠之助は、享保二十年(1735)支配所村々に、「大庄屋取立につき廻状」(『神奈川県史4』No.42)を廻し、

その中で記している。
「一足柄郡村々之内、前々者大庄屋在之候哉、又ハ古来より大庄屋と申ハ無之哉、…」
蓑笠之助は、大庄屋があつたかどうか分らないが大庄屋制を復活したい、と記している。

元和・寛永初期の支配・管轄体制の変遷

郡別	足柄下郡	足柄上郡	足柄下郡	小田原城	
村名	* 小曾 * 曾我 * 船我 * 岸我 * 原谷 * 津村	* 喜柳 * 虫弥 * 篠田 * 久都 * 山久 * 都西 * 河内 * 村所 * 夫良 * 野村	* 塚怒弘 * 飯駒宮 * 金岡仙 * 山沼山 * 村沼山 * 村沼山 * 村沼山	* 網原酒 * 小今多 * 風湯根 * 岩福浦 * 宮上村 * 久小 * 板橋 * 野台 * 村橋	* 中新千 * 下連 * 里屋代 * 新正 * 田寺 * 村
年代	慶長17 " 18 " 19 元和1 " 2 " 3 " 4 " 5 " 6 " 7 " 8 " 9 寛永1 " 2 " 3 " 4 " 5 " 6 " 7 " 8 " 9 " 10	小田原領 大久保相模守忠隣			(番城) ↓
幕府代官 中川勘助					城代
幕府代官 守谷左太夫行広					
幕府代官 森川六左衛門長次					(番城) ↓
幕府代官 八木次郎右衛門重朋					城代 近藤石見守秀用
小田原領 稲葉丹後守正勝					(高木主水正成) ↑

(注) 寛文12年の各村村鑑を中心に、「近世小田原稿本(下)」 「新編相模國風土記稿」 「寛政重修諸家譜」 「箱根古記録」 (東海道箱根宿間所史料集2) 「葦山町史11」等を参考に作成。それ以外の資料をもとに推定した村は* 印を付した。なお、番城期は複数の大名・旗本が交替で在城している。

以上、元和・寛永初期の少なくとも足柄上・下郡の代官支配下の幕府領では、「大庄屋制が布かれていた」と、言えよう。

なお、上大井村の左京助は天正十九年に大庄屋であったと記され、舊家太郎兵衛の先祖は、「天正十九年、此職を停止せられ」とあり、曾我原村の中村祐良も天正から慶長期を窺わせる記述である。大久保忠世・忠隣も大庄屋制は採用したが、中止したことが考えられる。

事件は「乱」だったのか！

私が所属する「小田原古文書の会」は、今年で創立二十周年を迎えた。そこで、これまで学んできた古文書の目録作成に取り組み、教材を整理していたところ、寛文十二年(三三)作成の「金井嶋村」明細帳(村鏡)の次の文章に目が留まった。

同村若宮八幡の説明である。「右者金井嶋村始より之氏神ニ而御座候、縁起之儀ハ先年御座候と申傳へ候共、一乱之時分より見え不申候由申傳候」若宮八幡の縁起(由来書)が、「先年(数年前)まであったと伝えられているが、一乱の頃から見えない」とある。この一乱について「下田隼人の事件」と私のメモがある。講師であった谷口得二先生の説明をメモして

いたのである。

おそらく、先生はこの一乱について、寛文十二年以前に金井嶋村近辺に「乱」があったかどうかを調べられて、下田事件と判断されたのであろう。

今回、瀬戸崎雄著『金井嶋村の研究』等調べてみたが、下田事件以外「乱」と言えるものは見られない。寛文十二年は、下田事件の十二・三年後である。当時「一乱」と言えば下田事件Ⅱ万治二・三年、と思われていたのだろうか！

この一乱を下田事件と断定できれば、同事件初見文書である『南足柄市史』収載No.206「施餓鬼奉納帳」寄付金募集の口上にある「一同徒党二茂及候」が裏付けられる。金井嶋村と関本村は同じ荻野庄の近村である。「下田隼人の乱」が近村に及んでいたことも考えられる。

ところが、他村の明細帳にも同様の記述があった。いずれも、同じ寛文十二年の明細帳で、久野村は神山三社権現に「縁記・わにくち一乱之時分二失申候」と、目明山(三毛)光寺にも「縁記一乱之時分二失申候」とある。

さらに、真鶴村明細帳も市ノ倉明神に「先年ハあんき御座候ヘ共、一乱之時失申候」とある。このように、三点の同様の記述があることは、別な事件のよ

うにも思える。しかし、前述したように乱と言える事件は他にはない。では、この一乱は特定の時期を意味しているのではなく、時期が分からないために慣用的に用いられたのか。とも考えたが、それにしても少な過ぎる。時期を記さない「見え不申候」「失申候」が多い。紛失した時期を記す必要性はないのである。敢えて、無言の抵抗として「一乱」を記した、と見るのは考え過ぎだろうか。

そして、これら三村は関本村と同じ西筋であるという共通点もある。「乱」とすれば「百姓一揆」であろう。読者諸氏はどう思われますか。

事件の隠蔽

『神奈川県史通史編』など、「稲葉日記」の事件隠蔽が指摘されていることを21号で記した。

立木望隆は、加藤誠夫著『義民下田隼人翁』(昭和四十五年・刊)の序で述べている。

「私も二十年ほど前、神静民報に『街の歴史散歩』を連載していた頃、錦通りの紹介で一度下田隼人を書こうとしたことがあった。いざとなると伝承以外に史料がない。困ってしまった。いわばお座なりのことしか書けなかった苦しい思い出を持っている。」

これまで、下田事件を調べられた先輩は少なくない。しかし、史料は既述の「施餓鬼奉納帳」以外は全く見られない。しかも同文書は、事件後百六十余年後の伝承を記したものである。

歴史に謎は付き物とも言えるが、稲葉氏以降でこれほど史料が見られない事件も珍しい。

今回、私が気づいた明細帳も、「一乱之時分」という曖昧な表現で、事件の直接史料とはなり得ない。いったい、これは何を意味しているのだろうか。

些細なことを施餓鬼奉納帳で誇大に記し、義民に祭り上げたのか。とすれば、史料などないが、これを立証するのは難しい。では、隠蔽工作が行われたとするとどうであろうか。前記隠滅説は「稲葉日記」の欠落についてである。『土芥寇讎記』に、稲葉正則の「世上になき課役」の徴収を「執権(老中)ノ威ニ恐れテ、訴フル者ナカリシ」とある。農民は訴えることを憚かっていた。稲葉氏の公権力による隠蔽工作が考えられる。

当時の幕府は、大名の取潰し・改易策を進めていた。家康の百家を越える除封を始め、二代秀忠の五十、三代家光は四十八、四代家綱十七、五代綱吉は二十七家の除封を数える(『廃絶録』『徳川加除付録』など)。

慶安四年(一六五二)家光に殉死した堀田正盛のあとを嗣いで下総佐倉十萬石を領した子正信は、領内における過酷な年貢の増徴が正信改易の事実と結びついて佐倉惣五郎事件の伝承を生んだという。惣五郎事件の「將軍直訴」の真偽は定かではないが、延享三年(一七四六)正信の弟正俊の子孫である正亮が佐倉に移封され、翌年、惣五郎の刑死を承応二年(一六六三)八月四日として、宮を再建し、口ノ明神として崇敬したという(『国史大辞典』)。

堀田正信の所領没収は、惣五郎刑死の七年後の万治三年である。稲葉正則の老中就任は明暦三年(一六五七)であるが、こうした堀田正信改易の経緯は充分承知していた筈である。「下田隼人の乱」が幕府に知られることを最も恐れていたであろう。

現に「世上になき課役」の徵収が隠密に知られ幕府高官に報告されている(『土芥寇讎記』)。

小田原領主を継いだ子正通はその後、政争に敗れたとも言われるが、京都所司代職罷免、越後高田への所替は左遷である。

「下田隼人の乱」の隠蔽は、稲葉正則にとってまさに薄氷を踏む思いであつたらう。

後述するが、墓碑等も当時建立されたものはない(奉納帳には「仮り二石碑も相立」とあるが)と

いう。「隼人の乱」を思わせるものは徹底的に許さなかったのかも知れない。

そう考えれば、史料が全く見えないことも納得できよう。明細帳作成のとき、稲葉正則は小田原領主で、老中在任中である。縁起の紛失時期を直接「下田隼人の乱」とせず、「一乱の時分」と曖昧に表現したことも考えられる。

三百五十回忌を前に

下田隼人の処刑年は、万治二年(一六五五)と同三年説がある。これは、現存する七ヶ所の墓石や供養墓の内、最も古いとされる二つの墓碑に、万治二子年が刻まれている。子は同三年であり、元号と干支が異なる刻銘をしているのは、後年の建立のためという(内田清著『義民下田隼人をめぐる十の謎』)。

こうしたことから、万治三年説が生まれたとも思えるが、必ずしも干支が誤刻で元号が正しいとは言えない。むしろ、江戸時代は元号より干支の方が親しまれており、元号の間違ひも充分考えられる。

私は、初見文書である「施餓鬼奉納帳」に「万治二年十二月廿三日死罪」とあり、万治二年を優先したい。現南足柄市域の万治検地は二年春にはほぼ終え

ているという(『南足柄市史』)。

二年説を否定する絶対的理由がないことと、三年であると検地後二年近くを事件の処理に要したことになる。この事件は、短期間で迅速に処理され、稲葉氏の隠蔽が成功したと考えるからでもある。

万治二年とすれば、来年は隼人の三百五十回忌にあたる。

昨年十一月十七日、谷津の大稲荷神社に合祀されている錦織神社で行われた同社例祭を見学させていただいた。下田隼人追善祭をも兼ね、下田家御子孫も参列されていた。

生前隼人は城下に向向いた時は、須藤町(現栄町)の郷宿を常宿にしていたことから、町内の人々は西郡のために身を投じた隼人の義侠を徳として、町内のこの社に秘かに併せ祀ってきたと伝えられている。大正三年、「かどや」地内から大稲荷神社に遷座したという。

『風土記稿』は、錦織神社を次のように記している。

「○錦織神社 古駿社火定せしを祀り西郡明神と唱ふ、慶安中(一六六〇)領主の命により、今の字に改しと云、例祭十一月十七日、(後略)」

隼人の記述が全くないのは、秘かに祀られたからであろう。小田原城のお膝元で隼人を公に

祀ることが憚れたことは容易に推察できる。隼人が「西郡のために死す」という神社の伝承も、奉納帳の記述と一致している。

また、時期は少し早い西郡明神を改名したのは領主(正則)の命、とあるのも気にかゝる。

隼人事件の史料は一点のみであった。それに「一乱」を記す明細帳を、三百五十回忌を前に、史料とすることが出来るか。

おわりに

昨年、下田隼人についてこれまで否定されていた「大庄屋」、あまり言われていなかった稲葉正則の佞奸私欲な性格と「世上になき課役」による年貢増徴、それに「事件の隠蔽」の三点に絞って述べてきた。

三百五十回忌は、「下田隼人の乱」を検証する絶好の機会である。幸い、小田原では錦織神社の例祭の際、氏子の皆さんが下田隼人の慰霊祭も継承している。しかし、南足柄では、これまで隼人慰霊の行事は行われていないと聞かされた。義民と伝えられる隼人の命日は、万治二年か同三年かは確定できない。

来年は小田原、再来年は南足柄(逆でも良い)で、「下田隼人の乱」を検証する行事を計画されたらどうか。是非、当会のお力添えをお願いしたい。

続・酒さ匂か史談 6

川瀬速雄

①漁場の大謀網

小八幡①漁場は其の漁獲高に於いて全国でも有名な漁場とされている。之は其の網の設置位置が非常に良いからである。即ち前羽村及び二宮の沖合に、漁師が俗に「セノミ」という五十尋位の浅い所がある。こゝは海藻も多く、従つて小魚が多く集り、これ等を餌として大きな魚も集まる。百尋線の辺を西の方に進む魚類ははなはだ多い。其の行手の良い場所に網を下す故、漁獲量ははなはだ多いのである。

酒匂小学校昭和十年編輯の郷土教育資料より鰯漁法を伝記す。鰯は群棲し、暖流及び暖寒交叉点附近を回遊し、産卵期に至ると沿岸に押寄せる。産卵期は冬期十二月より翌年五月頃に至る約半年間の長期に亘り、南沿岸近くで産卵する。

鰯は出世魚と言われ、孵化して一年間位を「わかなご」、一年より二年までを「いなだ」、二年より三年までを「わらさ」、三年以上を「ぶり」と呼ばれる。

鰯の沿岸回遊は決して出鱈目のものではなく、一定の気象と、水温と、情況とに左右される。殊に産卵期の鰯はこの情況に最も鋭敏である。鰯群が沖より沿岸に深く入つて来る最好情況は次の如くである。

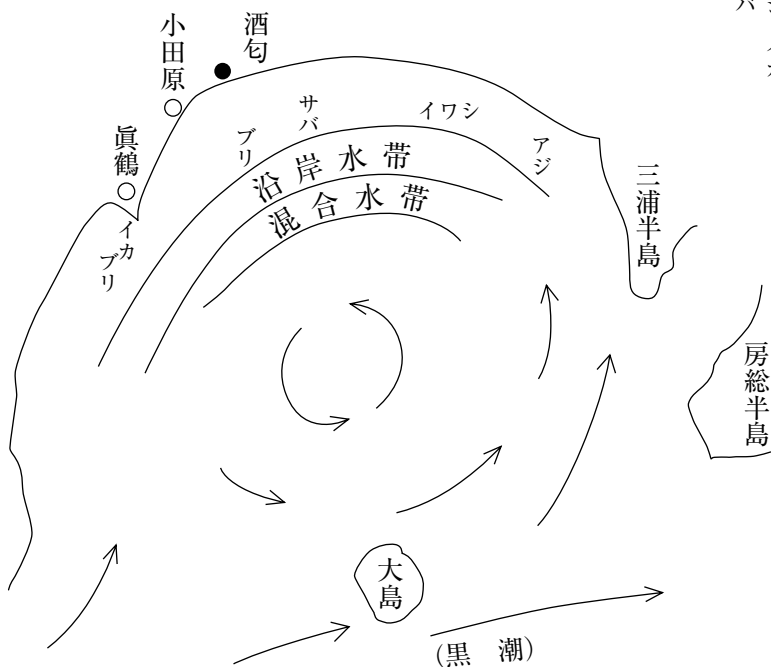
1、水温 摂氏 15 ～ 16 度（深さ 50 米）

2、気象 此の關係は静岡県水産試験場長三浦氏の発見によるものであつて、即ち旋風の起つた場合（旋風とは冬期に起る暴風雨で、夏期、秋期に起るものは颱風と言ふ）気温及び潮流に変化を起し、俗に言う「南陽氣が来ると鰯が獲れる」ということである。中国揚子江附近に低氣圧が生じ、オホーソク海上に高氣圧が起つた場合、その中心を結ぶ線が、相模湾上を通る子午線となす角度が約 67 度位の情況になると、施風が通過する前及び旋風が消失して逆の氣象情態（逆旋風）を生じた後、水温及び潮流が最好適の情況となり、鰯群が沖より沿岸に向つて産卵のために押し寄せるのである。

酒匂小学校教育研究部（郷土教育資料）より抜粋 ①漁場の大謀網
相模湾ノ海況ト漁況

- (1) 水温 八度 ～ 一二度
(2) 比重 一・〇二六 ～ 一・〇二四
(3) 魚族

マグロ カツオ
ブリ イワシ
アジ イカ
サバ



相模湾ニ流ルル潮流ハ豆総ノ沖合ヲ北流スル暖流（黒潮）ノ余勢デ起ルモノデ、伊豆沿岸ヲ洗ツテ北上スルモノ、大島附近カラ三浦半島ヲ衝イテ西ニ流ルルモノトヲ主トシ、其流勢ハ時差ト天候トニヨリ差異アルモノ、平均一時間、一哩乃至三哩ノ速度デアル。魚族ハ種類ニヨリテ異ルモノ、大抵混合水帯ニ棲ムモノガ多い。而シテ沿岸水帯ノ狭メラレシ時ニ豊漁トナル。

大謀網

漁獲方法は、18頁の図の如くに浮、錘で漁の網を張る。その時期は十月で、遅くとも十一月末までには完成させる。

鰯群ハ氣象水温ノ関係即チ産卵ノタメ、沖合ヨリ沿岸ニ押寄セルニ適當ノ情況ニナルト沿岸ニ近ヅク。シカシテ所々ヲ游泳シテ一群ノ先頭ガ垣網ニ近ヅクト、魚ハコレヲ認メテ驚イテ垣網ニ沿フテ沖合ニ脱出セントシテ身網ノ中ニ入ル。身網ノ入口ニハ見張船ヲ置キ、昼夜間断ナク見張り、鰯群ガ身網ノ中ニ入ルト、合図ヲシテ身網ノ口ニ下ゲテアル前掛網ヲ引キ上ゲテ口ヲフサグ。コレデ鰯群ハ全ク囊中ノ魚トナル。サテ合図ニヨツテ知ツタ浜ノ見張所ハ、漁夫ニ命令シテ勇シク沖合ヘト船ヲ出ス。準備ガ出来ルト身網ノ左ノ方ニ船ヲ横ニ並べ、漁夫ハ襪一ツノ裸体トナリ(ドンナ冬ノ寒イ日デモ)約百五十人位ノ人数ガ一斉ニ掛聲勇マシク網ヲ手繰ツテ行ク。ダン／＼網ヲメメテ魚數マデ行クト手繰リ止メテ魚取ニ掛ル。魚取ハ一人々々ガ手鉤ヲ持ツテハネ上ル鰯ヲ引掛々々ドサリ／＼ト船中ニ投ゲ込ム。船一パイニナルト大漁旗ヲ掲ゲテ、櫓拍子ソロヘテエッサ／＼岡ヲ目指シテ漕ギ寄セル。岡デ

ハ魚屋ガ雲集スル。貨物自動車ガウナツテ走ル。カクテ海陸共ニ活氣ヲ呈シテ漁夫ハ会心ノ笑ヲ満面ニタタエテ右往左往スルノデアル。鰯群ガ余リ多ク入り過ギタトキハ、其ノ半分ヲ網ヲ下ゲテ後方ヘ逃シテ網ノ切れルノヲ防グ。逃ゲタ魚ハ身網ノ中ヲ游ギ廻ル。第一回ノ魚ガ取り終ヘルト更ニ又初メカラ手繰リ出シ、前述ノ如クシテ全部取終ヘルト前掛網ハ下ニ下ゲ、海ハモトノ静寂ニカヘル。朝夕二回網メヲナス。

小八幡漁場大謀網ノ經費

(昭和十年)

設備費

浮竹―浮標ニハ孟宗竹目通一尺乃至一尺一寸、長サ四間ノモノ二千本位ヲ用ヒ、買入レ先ハ茨城縣ヲ大部分トシ、関西地方諸縣、静岡縣地方ヨリ汽車便ニテ輸送サル。身網ノ浮ハ長サ四間ノモノヲ其儘使用シ、垣網ノモノハ二間ニ半切シテ用ウ。網―材料ハ南京麻ノ糸ヲ使用シ、コレハ支那揚子江附近ニ産スルモノヲ用ウ。網ハ繩及マニラロープヲ用ウ。而シテ身網ハ二張乃至三張ヲ用ヒ、二十日交替ニ入レ換ヘ、網ノ手入レヲナシ損傷ヲ防グ。古網ハ製糸原料トシ、コレハ重ニ煙草ノ巻紙ニ製セラル。

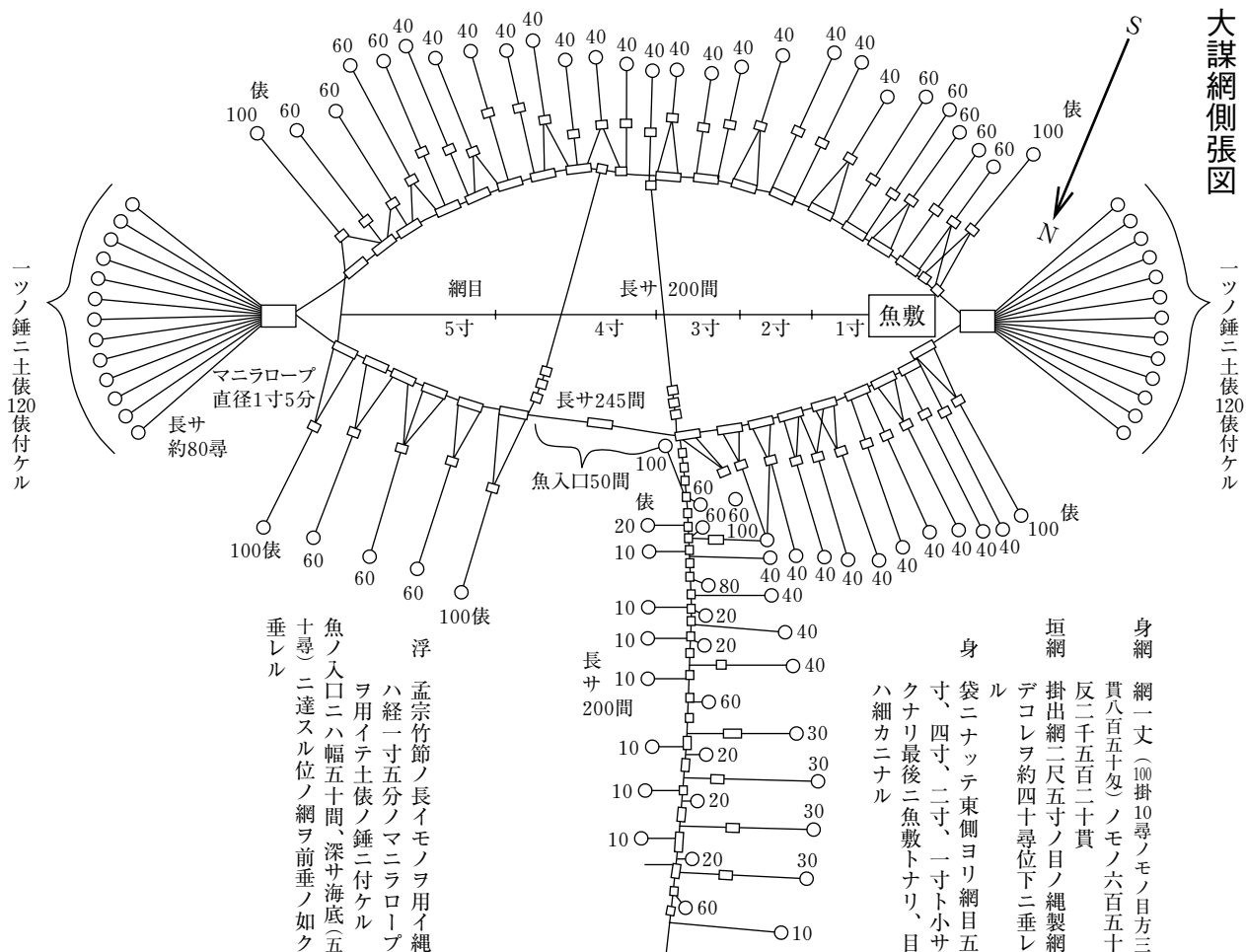
漁場ヲ設備スルニ要する費用ハ大略次ノ如クデアル。

網代	二七、〇〇〇円
網(ロープ類)代	八、〇〇〇円
垣網繩代	二、五〇〇円
染料代	二、〇〇〇円
竹代	一、〇〇〇円
土俵代	一、〇〇〇円
機械船備船料	二、〇〇〇円
(一隻ノ造船料二万五千円位)	
網メ船八隻(新設トシテ)	五、六〇〇円
台船(新設トシテ)	一、二〇〇円
防長船(傳馬)3隻(新設)	六〇〇円
網積船(新設)	一、二〇〇円
垣網船(新設)	五〇〇円
運搬船十隻	二、〇〇〇円
経営ニ要スル費用	
漁夫―沖	一三五人
―岡	二五人
監督	一三人
賄方	三人
事務員	二人
以上 給料・合計	二五、〇〇〇円
賄費	六、〇〇〇円
其ノ他	一、〇〇〇円
総計	九二、一〇〇円
以上大略ノ見積デ、一期間ニ大略十万円ヲ要ス。	



〔小田原名所〕海岸の網引 絵葉書(大正時代) 鰯定置網の引きあげの情景。海に入れてから1ヶ月ほどで藻が大量に付着するので、新しい網ととりかえて浜で手入れをする。

大謀網側張弓



赤岩賢三先生のこと

続「酒匂史談」を読んで

長田 マサ子

本誌前号(第二四号)に、川瀬速雄さまが酒匂画匠の重鎮は井上三綱・正子画伯夫妻、そして、井上画伯夫妻の門下生である赤岩賢三である、として、三画伯のご経歴などをまとめられています。

私は、油絵が好きで赤岩賢三先生にご指導をいただいた経験があることから、この記述を大変懐かしく、また嬉しく拝読しました。

赤岩先生は大変暖かく熱心な方でした。

絵画には心があり、作者の思想・風格が込められていることを教えられました。

私が好きな「ミモザの花」を描いたところ、小田原市展に出品するから、と言われました。

それが、入選作品に選ば
のように思い出されます。

絵画には人の心の広がりが必要である、と常に教えられておりました。

なお、私がミモザの花を好きになったのは、若い頃、島崎藤村の紀行文を読んだことです。

藤村はヨーロッパ旅行で、スエズから地中海を航海し、フランス沿岸に咲きほこるミモザの美しさに

魅せられたことを記しています。私はその藤村の文章が忘れがたく「ミモザの花」を描きました。婿夫

婦はその絵を居間に飾り、わが家の庭にミモザを植えてくれました。春になると一斉に黄色い花を咲か

せ、島崎藤村の紀行文を思い起こさせます。

居間で「ミモザの花」の絵を見ていると、赤岩賢三先生が偲べれます。

(會員 鴨宮在住 86才)

葦山・修善寺の史跡を巡りて

田中 豊みのる
(イラストも)

6月5日、今にも泣きそうな梅雨空にバスは出発した。(参加者32名)

箱根新道に入ると早くも小糠雨がバスの窓を濡らし、過ぎ行く山々は霧の中に淡い墨色にぼかされていた。只、今を盛り咲く山法師の白い花が僅かにこの旅を彩っていた。

会長の挨拶に続き、参加者全員が自己紹介を。通り過ぎこそすれ近いが故か、葦山・修善寺方面に疎遠の人が多かったのは意外。

三島を過ぎて葦山「蛭ヶ小島」に着く頃は、幸いにも雨は上がり今日の案内をして頂くボランティア協会会長小松氏の出迎えをうけた。葦山は2003年4月より接する長岡・大仁と3町合併し人口49,600人の「伊豆ノ国市」となり、お隣の修善寺・天城・土肥らは合併し「伊豆市」になったという。ゆかりある古名を何とか残してほしい。

「蛭ヶ小島」は平治の乱で敗れた源義朝の遺児、頼朝が池禅尼の乞いにより配流され、北条時政の息女政子との恋におち、北

条屋形に移り住むまで20年間を送った地である。やがては治承4年(1180)旗揚げにいたる。

この辺りは湿地帯で大小の中洲が点在し、度量なる狩野川の氾濫が繰り返され、蛭の多かったことからこの地名が付いたという。現在は島の面影はなく木々が植えられ、休憩所が配されお茶の接待を受ける。庭園には頼朝と政子の恋にまつわる「楡の木」は伊豆ノ国市の木に選定され、この葉を身につけると幸せを呼ぶと「お守り」に持ち帰る人が多く、植えられた木は丸坊主になっていた。この周辺に点在する史跡を巡る。

徒歩で程なく、門構え・黒堀に囲まれた「江川邸(国重文)」に着く。幕末期文明の先駆者であった38代江川太郎衛門英龍(担庵たんあん)が世に知られているが、江川家は清和源氏の流れをくみ、源満仲の二男宇野頼親を祖とし、保元の乱(1156)に崇徳上皇側につき破れ8代親信が13名の従者と共にこの地に落ちのび定住したという。その子治信は、この地に流罪となっていた頼朝挙兵に応じ参戦し

た。以来鎌倉、室町時代と伊豆の豪族として地盤を固め、この地を流れる狩野川の支流の名に因み、江川と姓を改めた。以来江戸時代に至り代々葦山代官を務め、伊豆・相模・武蔵・甲斐・駿河の天領を支配、現在は41代目で東京に住まわれているとか。

38代英龍(担庵)(1801-1855)は蘭学を修め、渡辺崋山・高野長英らと交流し国際情勢を知り、日本の置かれた立場を憂慮、幕府に対し沿岸防備・農兵制度を建白しその訓練に従事、まさにこの時代の先駆者として活躍、多くの後継者を世に送り出した。

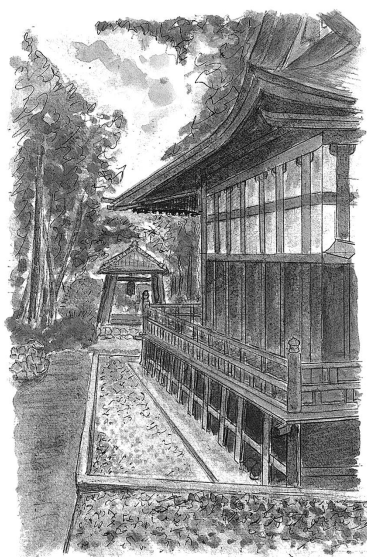
農兵の訓練場「枅形」を左に見て、表門をくぐり主屋を回りこみ大櫓を中心とした広大な中庭には数々の蔵・建物が建ち並び。裏門あたり

に日本でのパン発祥の地として蘇峰による「パン祖江川担庵邸」の碑柱が建つ。生憎、曇り空でその姿を見ることが出来なかったが裏門から見る富士は日本一と白河楽翁(松平定信)が谷

文晁に描かせたというエピソードがある。

緑陰の薨開化の息吹染む

建立が16、17世紀にさかのぼるという主屋は162mを要する重厚な単層入母屋造り葺葺きで仰ぎ見る12m余も有ろう豪壮な架橋が望まれる。屋根裏には伊豆に流された日蓮が画いたという曼荼羅を納めた小筐、この家を700年以上も無事に守っているという。50坪もあろうかと思う土間には大きな竈がえられ、全国から集まった俊英が働く息吹が感じられた。江川邸に併設された葦山町郷土資料館には伊豆ノ国市に出土した埋蔵品・重要書画が展示されていた。江川邸を出て北に歩を運ぶと満々と水をたたえた貯水池を前



大蔵山平立寺(江川家寄贈)

に「葦山城址」の籠城山が臨まれる。この地は古来から水争いが絶えなかったがこの池によりその調整が出来るようになったという。葦山城は代表的な平山城で堀越公方足利政知の臣外山豊前守により延徳3年(1491)築城されたが、伊勢新九郎長氏(後の北条早雲)に政知の子茶々丸が敗れ、ここに堀越公方は滅亡した。その後、長氏は勢力をのばし小田原城を奪取、関東に覇を上げた。葦山城は秀吉の小田原征伐のみぎり、北条氏規が織田信雄・福島正則・細川忠興に開城するに至った。

「代官屋敷」と称する食堂で空腹を養った後、江川邸より南東に300m余り、江川家の菩提寺「大成山本立寺(日蓮宗)」に向かう。山門を潜り木立に囲まれた参道を行くと、まだ新しい石段を登って本堂に達する。本堂裏手に江川家暦代の大名並みの墓がならび、周りを家臣群の墓が散見された。

「葦山反射炉」を見学。この炉は嘉永6年(1853)ペリー来航によりにわか近代制鋼改革に追われ、高島流砲術を学び、海防に意を注いだ江川英龍の建言により銃砲鑄造のため造られたもので耐火煉瓦は1700度の高温に耐えたという。大空に聳え立つ4基の炉は近代化への

大きな足がかりとなったのである。この炉によって28基が鑄造され、現在1基が靖国神社遊就館に展示されているという。炉の回りは小公園化され市民の憩いの場となっていた。裏手に建つ地ビールレストランと更に裏手の茶畑のコントラストがユニーク。

更にバスを進め「願成就院」へ。文治5年(1189)頼朝の奥州藤原氏征伐の祈願として舅北条時政が建立した寺で、昭和25年に国宝に指定された運慶36歳の作、寄木造阿弥陀如来(現在は国重文)の他、寄木造毘沙門天・不動明王(体内より運慶作、時政施主の明記札あり、いずれも国重文)・3代執権泰時奉納の政子地藏菩薩像を蔵す。特に力感溢れる毘沙門天、端正なお顔立ちの地藏菩薩に注目した。かつては平泉毛越寺・宇治平等院・浄瑠璃寺に並ぶ広大な池を有する大寺院であったという。境内には早雲によって滅亡した茶々丸の墓、66歳までこの地に帰郷した時政の墓があり、『時

政のふるさとのかす露の墓 秋桜子』の句碑が残る。願成就院から北に10分ばかり行けば「堀越御所跡」、美しく整地されていた。その向かいに五島慶太建立の「北条政子産湯井戸」の碑柱の奥、一般住宅の前に小さな井戸があり、雪ノ下が小さい花を咲かせていた。

尼御前も産声あげし梅雨の井戸 政子の出現に仲をさかれ失意のうちに自殺した頼朝の最初の妻、伊東祐親の娘八重姫を祀った真珠院も近いという。途中、頼朝旗揚げの際討たれた目代平兼隆(山木判官)の館跡を垣間見た。バスは伊豆箱根鉄道の線路をまたぎ修善寺に向かう。狩野川辺より有料道路に入り到着。



修善寺山門

温泉場特有の街並みを通り抜け「独鈷の湯」の前の石段を登り「修善寺」に参詣する。この寺は真言宗から建治元年(1275)建長寺開山蘭溪道隆により臨済宗に改宗、一時衰微したが延徳元年(1489)早雲が再興、曹洞宗に改宗するという変遷を持つ古刹である。時政に追われ幽閉された鎌倉2代將軍頼家の悲劇を描く岡本綺堂作「修善寺物語」は記憶に久しい。

朱塗りの虎溪橋を渡り、向かい小道を登り詰めたところに母政子がわが子頼家の菩提を弔うため建立した「指月庵」。更に石段を数段上がり頼家の墓所に参り薄幸の将を偲ぶ。傍らの額紫陽花の薄紫が寂しげに露を含んでいた。

紫陽花の色薄幸の人に似て

修善寺より有料道路で幾多のトンネルの合間から霧に包まれる伊豆の山々を見つつ帰路に着く。雨予報に反し傘を使うことはほとんどなく、暑くもなく寒くもなく盛り沢山の行程を走破できたのは参加者の精進の賜か。

途中、村の駅で伊豆の思い出を買い込み一路箱根越え、18時過ぎ小田原に到着した。

(08年6月記)

小田原の商店街

史料委員会

6、小田原錦通り商店街

小田原駅に近いこの商店街の三角地帯は、第二次世界大戦中の強制疎開によって建物が撤去され、その後しばらくは広場となっており飲み屋の屋台などが出されていたらしい。

また、昭和三十四年の小田原市明細地図で「十字屋百貨店」となっている所には「戦後しばらくは闇市みたいな店がいつぱい立ち並んでいた」(佐々木初枝さん談)

このことについては、昭和二十一年十一月から昭和二十三年六月まで「小田原新聞」に掲載された「小田原廻り」という文章の中にも次のように記されている。『小田原駅前浦町角に家庭街が出現した。三十六軒が家庭用具をならべている、奥の方には焼鳥屋や魚屋がいてよい香りをブンブンさせているので、誘はれて入るものは多い、この影響は従来の各商店街に相当にさはっているようだが、闇のなすり合いをしたところで仕方がないと言うのでお互いに競争気分を現はしている、斯くして品物

は間に合い、だんだん勉強の正常化を出現しよう』(この文章は、小田原新聞発行責任者であった府川武男氏の提供である。)

しかし、昭和二十四年五月十日にマルタから飯田屋さんまでと、その奥にかけて三十軒余が火災で焼失した(飯田屋さんで錦通りへの延焼が免れたのは、富士土建の建物が当時としては珍しい鉄筋コンクリートであったから―佐々木初枝さんの話)こともあって、昭和二十六年十一月二十四日には、消防本部から店の撤去命令が出され撤去された。

昭和二十八年八月には第一回「小田原商工まつり」が実施され、写真一、二、三、四に見られるように、それぞれの店から工夫を凝らした出し物や、浴衣姿の人たちの行列などが行われた。

昭和三十一年(左)五月三十一日には国道改修工事のために、これまで小田原駅と箱根板橋駅間を運行していた市内電車(写真五)も廃止される事になった。

昭和三十四年四月一日には駅前の三角地帯に西武ストアが地

下一階地上五階のビルで開店した。その年の十月には、市内電車の小田原跡地に箱根登山デパートがオープンした。そのために四月に開店した西武ストアはまもなく撤退するようになった。その後には日興證券が入った。

小田原錦通り商店会は、昭和三十九年四月、商店街としてアーケード作りのために法人化することとなり「小田原錦通り商店会協同組合」としてスタートし、現在に至っている。商店街としては「北条祭り」などを実施して客を呼ぶ工夫をしてきたが、後から行われた「北条五代祭り」と競合したために、現在では「北条楽市」として残っているようだ。

(鳥居記)



重乃井旅館 (昭和30年代)



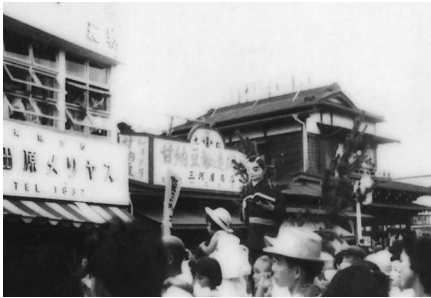
現在の重乃井ビル



栄華軒 (昭和30年代)



現在の栄華軒



1. 小田原メリヤスから昇玉まで



2. 飯島クリーニング店が左側に見える



3. 山崎食品前



4. 石井菓子店前



5. マルタ食堂横から駅を望む

写真に見る街角の変遷

写真提供・聞き取り調査に協力
してくださった方

重乃井 佐々木 初枝

協同組合事務局長

佐々木 康之

榮華軒 平出 唯人

マルタ 丸田 茂晴

(敬称略)



(注)
ゴシック字体は、
平成20年(2008)現在
ひき続いて営業している店

昭和34年当時の「錦通り商店街」

片岡日記 ④1

片岡永左衛門

大正十五年六月
廿五日 晴
佛事ニテ福浦露木ニ至り、五時
帰宅。

主要部分ハ殆ト落成、未建築
ノ分共、工事凡廿五万円ナリ。

大正十五年七月

一日 晴

本店ニ行、四時帰宅。

二日 曇 出勤

三日 晴

午前七時半、宮ノ下ニ出張 預
金交渉ニ役場ニ立寄、帰途、福
住ニ面会 六時帰宅。

四日 晴

吉田氏見舞ニ行、病人追々快方。

五日 雨

昨日午後より雨。

六日 曇

七日 半雨

今井町長ニ面会シテ出勤。

八日 晴

久々にて暑氣甚し。

九日 晴

決算ニ付、夜業中を見回り九時
帰宅。

十日 晴

十一日 晴

在宿、執筆。

十二日 雨

出勤、午後より大雨

ふりしきる軒の霰か雨の音

おとろかしても すくる夕立

四時頃より止む。七時頃、親一

婦着洋服を持来る。早速着用シ

テ見る。先日來植木屋來り樹木
ノ手入、掃除も出来、盆の支度
之世話シ、昨年ハ関東銀行之休
業中に、何もかも遠慮し、等閑
となせしニ返し、本年ハ拙者は
迄ニ得意ノ時代なり。顧は、三

十八年ニ藤沢銀行ニ入り、四十

年より不況となり、不安ニ日を
送りシニ、四十三年各行と合同
シ、関東銀行之新設となり、一

時安心せしも、間もなく不安と
なり、示來十七年間ノ三分ノ二
ハ不安ニ過し遂ニ休業之不幸ニ

落入りしも、昨年関東興信銀行
ヲ新設し、以來ハ金融上ノ不安

ハ一掃セシニ加へ、整理も進涉
シ、弥々拙者之管掌セル小田原
支店及宮ノ下出張所ハ、整理案

ニ依ル未納利子も殆ト整理し、
貸付も過半ハ整理済となり、本
店ノ氣受もよく、日々之出勤も

活氣ヲ生し、家庭ニ於ハ全家壯
健シテ、家計も何時退職なすも

差支なく迄ニ、親一方も良好と
なりしなと語り續て、一同喜悅ニ
夜を更せり。

十三日 晴

出勤 例年之通墓參。夕刻より

閑に至り、九時帰宅。親一、午
後帰宅。

十四日 晴

出勤、監査役來監。

十五日 晴

十六日 晴

午前十時三十分發ニテ本店行、
四時帰宅。

十七日 晴

郡廢ニ依ル郡長書記之送別会出
席。

十八日 晴

十九日 晴

大蓮寺施餓鬼会、細君ゆく。

廿日 晴

九時發ニテ宮ノ下ニ出張。暑氣
甚しく、正午宮ノ下ニテ九十二

度。湯本塔之沢間之道路も修繕
出来、危険ナシ。二時發ニて帰
宅。

加奈子東京より来る。

一昨日福浦にて
五月雨のそらにひひきておお
しくも岩をかすめて波の寄り
くる

廿八日 晴

夜に入りて雨

廿九日 曇

三十日 雨

出勤、縣立小田原中学校校舎復
旧工事、第一期第二期工事出来
ニ付、移転様式旁々内祝之招待
ニテ參校。

第一期工事惣建坪三百九十七
坪、第二期七百五十七坪ニテ

史談再録⑤

『小田原史談』第十五号 一九六二年(昭和三十七年) 所載

怪 異 綺 談

門 松 利 平

私が十二、三才の頃だから今から五十年位前の話、その頃は飯泉観音の堂守として仁王門前に六十才程の老夫婦が住んでいて、本名は誰も云わず堂久さんで通っていた。

土地の者ではなく堂久坊として観音様へ仕える俗僧だったろう。もともとこの観音堂には弥勒院、常福院、広福院、宝珠院、勝地院の五院に大徳坊、堂久坊(道久坊)の二坊があり、合寺して勝地院だけが残し、寺名も改めて勝福院となつて現在に至つたもので、他の院坊の建物は全部取壊されてその墓地だけが面影を偲ばせているに過ぎない。

その堂久さんが老妻も死に、堂舎も腐朽したので観音堂の一間に起居して食事は勝福寺でする様になつてからの話。観音金堂の西側にあつた大日堂、この建物も大正十二年九月一日の関東大地震で倒壊未だに再建出来ないが古色蒼然全く文化財ものだった。

堂久爺さん時々農家へ夜話に出かけて十一時頃帰るのが例だ

つた。早く堂間へ入って寂しい寝床へと本堂拜殿まで来ると正面階段が無い。はてな、此の辺りが確かに上り口だが?と考えた時にはもう遅い。今の者に想像も及ばない話だが、既に堂久さんは完全に化かされているのだ。右かな?左かな?と迷えば迷う程階段は見付からない。これから堂外巡りが始まるのだ。いつでも二時間位はしてやられるのだから少なくとも五、六十回は右に左に巡らされるだろう。年は老つているし足は棒の様に、愈々歩けなくなつて坐り込んで仕舞う。そこで漸やく気がつくのだそう。時には東の空が白らみかける事もあるというから大変な化かされ方もあるものだ。

度重さなれば愚痴話も仕なくなるもの、これが村の話題になつた。化け物の正体確かめんと血気の若い衆総出の探索を始めたが判らない。堂久爺さんの嘘つ話ときまりかけた。

当時の若者は秋ともなれば糶摺りは自家自製具だから親の米

を盗み出して売り飛ばしては小田原遊廓へ女郎買いに行つたもの。一円あれば一晚遊べたのだから嘘の様な話。

この遊蕩青年も夜中すぎれば家の敷居は誠に高く、壊れかかった入扉も鉄壁に思えたのだろう。同行四、五人、この大日堂の中へ潜り込んで仮睡すること屢々だった。

時は晩秋、外観音境内は墨を流した様な暗黒、おまけに秋雨降りそぼつてお詠え向きの舞台装置となる。と、この大日堂に覆い冠ざる様に南側にある大銀杏の天辺から、まるで大樹が引つ裂かれた様な音がしたかと思う間に、ミシミシずしんと堂をも揺るがすばかりの響がして堂内の彼等も一とかたまりに抱き合つたそう。夜明け近く堂から出て見ると銀杏の大枝が根元から折れて落ちていた。

それから大日堂の借宿利用はパツパツしなくなつたが、風もないのにあの周り三尺もある生ま枝が、どうして引き裂かれたかの噂は当分村中を賑わした。とうとうこれは関本の道了尊の天狗が夜遊びに來ての悪戯だらう、と云う事にけりがついた。

この大日堂が震災で倒壊して取払いになつた時、もう堂久さんはとうに死んでいたが、床下に山の様に貉のため糞が幾つも

あつた。さては堂久爺さん、すぐ傍の大日堂下の古貉にしてやられたのだな、と漸く嘘でなかつた事を納得した訳。

貉といえば雨のそば降る秋から冬にかけての観音境内には、ともすると狐の向うを張つてか、提燈行列を見せたものだ。これは大徳坊狐だという人もあつたが後から消えて前へ点いて行く狐の嫁入り提燈は面白い見物だったそう。

狐といえば今小泉吉之助君の家が建っている所は、当時牡丹桜が美事に咲く薬師の小堂があつて眼病に効果あらたかなりと、小絵馬に平仮名でめの字書きしたのが幾つも下がっていたがこの薬師堂にも怪異談がある。

薬師堂から四、五分で帰りつく所に通称屋号籠屋という農家がある。弥アさんといつてもう五十近かつたが中々のしつかり者だし頭も使えて区長まで勤めた位の人望家、この弥アさんがこれも村中へ用達しの帰り道薬師堂前の曲り終つた利那後頭部の直上で突然一声、「飲むぞっ」の大音声、驚ろいたのなんの、履いた草履を脱ぎ棄て、後をも見ずに一目散、家の中へ泥足のま、飛び込み、呆氣に取られた家族に口もきかず、真青な顔色で床にもぐり込んで、とうとう二、三日起きることが出来な

った。

考えて見れば飯泉も、今日こそテレビ、冷蔵庫、洗濯機、自家水道、掃除器が競争の様に普及され、リヤカーは四輪車に、自転車はオートバイに、遂に小型ながら家用自動車も四、五台を数え、電化生活謳歌時代を現出したが、三十年前には狐、貉に化かされていたのだ。村も変ったが、狐、貉も今どこに棲んでいることか。思い出して懐かしい怪異綺談だ。

「怪異綺談」(門松利平)

「怪異綺談」というものの、門松さんの語り口には、そんな話があったとサと、楽しみ懐かしんでいる様子がある。

この号は冒頭に中野敬次郎氏の「真説曾我兄弟」という武張った読み物が連載中で、他にも「中垣謙斎を偲ぶ」(蓑田長平)ありという次第。その中であって、門松さんの昔話なんとも印象に残った。ところで、「ともすると狐の向こうを張ってか、提燈行列を見せたものだ」とある。狐ならぬ「貉の嫁入り」なんてのをホントに見た人がいたんだろうか。そう思わせるところが「怪異綺談」たる所以か。今から約百年前の飯泉観音とその周囲がどのようなであったか、少し窺えた。

(青木良二)

旅のつれづれ俳句日記

剣持 芳枝

もう四年前になるだろうか、十月末群馬県伊香保温泉に友人のMさんと伊豆箱根ツアーの一泊旅行に参加した。ツアー客は十六人少人数なので、ゆったりと椅子を使い、ずい分楽だった。海老名、三芳のサービスイリアで休憩。上州物産館でゆっくりと昼食をいただいた。午後榛名湖到着。山に囲まれた静かな湖のたたずまいは、喧噪を逃れてやって来た旅人の心を癒すには充分だと思った。湖畔の宿の歌碑の前では往年の歌手の歌う姿を思いおこした。一度ホテルの部屋に落着き荷物を置いて近くの竹久夢二記念館に行った。とてもレトロな感じの素敵な建物だった。中に入るとステンドグラスや明治大正の照明器具が、やさしく部屋を照らしロマンチックな気分が駆られるようだった。二階の書斎には懐かしい夢二の絵や少女雑誌がいっぱい見られた。

昼ちろる夢二の部屋の灯りけり

伊香保温泉のメインである石段街にも行ってみたが、下から見るとなにも変哲のない石段で、二三段上ってみたが止めてしまった。

説明によれば、山形の山寺、四国の金比羅宮と並び日本三大石段のひとつだとか、あとになって上まで行ってみればよかったですと後悔しきりであった。

翌朝早く起きて八階の露天風呂より、山の間からきらきらと朝日の昇るその荘厳な光景に、胸のすくような喜びを感じた。

帰途は榛名富士のなだらかな山なみに、紅葉の美しい風景をたっぷり堪能出来て、この上もなく秋の風情を全身に感じることの幸せを、心からい、旅だったなと思ったのである。

山なみのゆつくり暮るる紅葉坂

新規会員紹介

田嶋 亨

小田原市中町二一七―二一
TEL〇四六五―二四―〇三六〇

訂正とお詫び

第二一四号新規会員住所・電話番号に誤りがありました。正しい住所、電話番号は次の通りです

直江 博子さん 住所

小田原市南町二一四―二七
鶴井 芳子さん 電話番号

〇四六五―三四―六三三六

計 報

平岡 高弥

小田原市早川七四

三井 孝

小田原市中町二一九―二九

米山 豊昭

小田原市中町一―一四―一〇

謹んでご冥福をお祈りします

「小田原史談」原稿募集

次号(第二一六号、一月発行)の原稿を募集しています。

締切は十一月二十五日(火)。

会員皆様のご投稿をお待ちしております。

原稿等の連絡先

小田原市東町一―二一―一八

平 倉 正

TEL〇四六五―三四―八三六三

＜郡上八幡と岐阜の史跡めぐり ご案内＞

日時： 平成20年11月12日(水)～13日(木)

会費： 31,000円

日程： ・11月12日(水) 小田原駅西口 6時50分集合 7時出発

谷汲山華嚴寺 — 横蔵寺 — 岐阜城 — 岐阜大仏 — 琴塚古墳 — 宿泊

・宿泊場所 ホテル郡上八幡 (TEL 0575-63-2311)

・11月23日(木) 宿泊地8時 出発

郡上八幡周辺をガイドさんの案内で周遊(八幡城址、宗祇水 など) —

虎溪山永保寺 — 犬山城 — 小田原駅西口(20:00頃)

受付： 平成20年10月26日(日) 午後1時以降随時受付

伊豆箱根トラベル小田原営業所 (TEL 0465-23-0266)

*当日都合の悪い方は申込だけされ、後日会費をお払い下さい。

＜初詣 隅田川七福神めぐり ご案内＞

日程： 平成21年1月6日(火) 8時～18時20分頃

会費： 5,500円

日程： 小田原駅西口 7時50分集合 8時出発

三囲神社(恵比寿神・大黒天) — 弘福寺(布袋尊) — 長命寺(弁財天) —

向島百花園(福祿寿) — 白鬚神社(寿老神) — 多門寺(毘沙門天) —

浅草寺(大黒天・恵比寿神)

受付： 平成20年12月18日(木) 午後1時以降随時受付

伊豆箱根トラベル小田原営業所 (TEL 0465-23-0266)

*当日都合の悪い方は申込だけされ、後日会費をお払い下さい。

落穂集

近年になく暑かった夏もようやく去り、爽やかな秋の気配が天地に満ちてきました。

今年の夏をより暑くさせたのは北京で開かれた五輪大会でした。お陰で八月十五日の終戦の日も脇へ追いやられたように感じられたのは僻目でしょうか。それでもNHKが連日「兵士たちの証言」シリーズを放送(BS)し、風化しかかっている戦争の傷跡を淡々と、しかし鋭く抉っていたのが印象的でした。それにしても中国の意気込みはモノ凄く、開会式の二千人を超す壮丁によるマス・ゲームには正直驚かされ、これだけの人を集め訓練したエネルギーを、もっと別のコトに使ったら、と思わされました。

本号の「史談再録」にムジナの話が出てきます。幼い頃両親から「暗くなつて外にいますとムジナに悪さされるよ」と諭されたこと思い出しました。

衆議院解散、総選挙と俄かに騒がしくなってきましたが、猪はおろか狐、狸のはびこる世の中が、民の暮らしに希望ある世となるのが試されます。

TEL 0465-34-8363
編集子 平倉 正

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店

小田原銀座 アオキ画廊

熱海 アオキクリニック

紳士服の **アメリカヤ**(株) **アルファ**

税理士 石原和夫事務所

伊勢治書店

 かまぼこ(株) **オクツ** 薬局 小田原ガス

小田原報徳自動車

かまぼこ 籠 清

(株)カネボウ化粧品小田原工場

神尾食品工業 株式会社

かみやま小児科クリニック

興 電 社

小 伊 勢 屋


国 府 津 館

(有) 小 松 石 材 店


COMTEC コムテック株式会社

さがみ信用金庫

趣味のこふく さくらい

箱根湯本温泉 春光荘
雀のお宿小田原  **カマボコ**

辰寿堂スポーツ

和 うどん 小田原城趾前 田毎のれんと味 **ぶる海** **ソビソニ 宮**

茶半家具株式会社

ちんぎ う本店

東京電力(株)小田原支社

割烹料理
うなぎ **鳥かつ楼**

和菓子 菜の花

杉崎茂法律事務所

平 井 書 店

(有) **古 屋 花 店**株式会社 **報 徳**建築金物 (株) 星崎仲吉商店
家庭金物

本 多 時 計 店

栄 町 **松 坂 屋**学生専科  **マルク**

諸 星 グ ル ー プ

曾 我 の 梅 干
塩 辛 ・ か ま ぼ こ **美の政**

みみづく幼稚園

ヤオマサ 株式会社